

# 1 餓沙羅幻想

餓沙羅幻想 目次

無何有	3
戰術甲冑	37
火葉庫	79
鋼人形	107
逃避行	155
尊天宮	213

一・

無何有

にて

望郷の夢

呼ぼう声

嵬よ嵬よと

足打ち付けん

▼  
 夢と現を分かち結界に覆われ、今日も幻想と不思議の絶えぬ楽園、幻想郷。

遙か東のザナドゥは、実り多き秋の彩りに包まれていた。

収穫の喜びに湧く人里を東に離れ、街道沿いを歩いて一刻。六地藏の並ぶ四つ角を超えてなおも進めば、やがて道は流れ下る玄武の沢へと辿りつく。六地藏の並ぶ四つ角を超えてな

盛夏にもひやりとした水を湛える清流は、秋も深まるこの季節、触れた指先が凍りつくほどに冷たく澄んでいる。水面に散り降る落葉を受け止め、滔々と流れ下る流れを沢沿いに遡り、転がる大岩や苔生す大樹を潜り抜けた先に広がるは、落差数百丈を越える九天の滝。

沢の始点となる滝壺の水底は深く、広がる水面は湖にも近い。幻想郷ができて千年、一度たりとて途絶えた事のない大瀑布に削られ続けた清澗である。ごうごうと唸りを上げ、白い飛沫を散らす大瀑布を背に、秋爽たる紅赤の彩りに身を包んだ木々は崖より張り出し、幾重にも紅葉の枝を重ねていた。

静寂と終焉を司る秋の姉神の恩寵かくあらん。飛泉の水沫鮮やかに、紅黄の緞帳に包まれて聳えるは、この郷随一の霊峰とそれに連なる山脈であった。

## 5 餓沙羅幻想

山頂は雲よりもなお高く、その峰よりは幾筋もの煙が立ち上る。かつては鬼の四天王が名たる群妖を統べ、いまは天魔を頂点に天狗たちの社会が築かれた地。

山々は幻想の中にかつての名を失って、今はただ「御山」とだけ呼ばれていた。

風景の美しさこそ格別だが、この地はすでに天狗の勢力下。「いつまで経っても入山禁止」の立札と共に、普段は哨戒の白狼天狗が小班を組んで巡回する程度の禁域である。

が、今日ばかりは趣が違っていた。

「さあ寄つといで！　まずは腹ごしらえしなきゃ始まらないよ！」

「はいはいそのお姉さん達、ちよいと見ていかないかい！　余所には無い珍しいものばっかりだ！　安くしとくよ！」

時ならぬ客足にごった返す出店には、天狗や河童は言うに及ばず、付喪神や地底の妖怪、山童に狸々といった顔までも詰め掛けていた。

派手な幟に暖簾を連ねた出店ではねじり鉢巻きの河童たちが商売に精を出し、朱絨毯を敷き詰めた特別席には、正装に身を包んだ天狗たちが杯を重ねて赤ら顔。櫓の上では厳めしい白狼天狗たちが警戒に気を張り詰めさせ、黒翼を広げた鴉天狗たちは報道の腕章を付けてカメラを構える。招待席に目をやれば、霊廟の道士や妖怪寺の住職達が重箱に舌鼓。

時ならぬ賑わいが山麓の滝に喧騒を響かせる中。周辺の岩棚に櫓を組み。張り出した巨木の

上に枝を並べ。紅絨毯の水面には幾艘もの船が渡されて。滝壺の縁にせり出した巨大な岩棚を囲むように、無数の宴席が設けられている。

岩棚は、高さ、幅ともに三十丈を超える一枚巨石が、滝壺の水流に削られ、水面上に張り出すように伸びたもの。瀑布を見上げる特等席のような岩上には、白幕に区切られた舞台が設えられていた。

警備の白狼が舞台袖で目を凝らし、付喪神の楽隊は音出しに余念がない。

「……………」

そんな舞台の裏手、楽屋の奥に落ち着きなく座るのは、表情豊かなポーカーフェイス、秦ころ。そっと白幕を押し開ければ、盛況な観客席の賑わいが嫌でも目に飛び込んでくる。心の頭上に跳び出した狐面は、小さくカタカタと音を立て、彼女の感情を表していた。

こころの装いは普段の洋装ではなく、厚板の着付に白の大口袴、鈴蘭の長絹。繡紋腰帯の正式な舞台装束である。珊瑚色の髪は結び上げられ、頭の後ろで止められていた。

「……………むむむ」

舞台前の張り詰めた緊張感は、演目へのテンションを高めると同時、言い様のない不安も一緒に運んでくる。空になった湯呑みに水差しから水を移し、こくりと唇を湿らせて、再度の深呼吸。小さく揺れる面をそっと抑え、こころは椅子上で所在なげに座る位置を直した。

「よう、どうだ？」

どたばたと騒がしい足音に、こころの頭上に大飛出面が跳ねあがった。

やってきたのは普通の魔法使い、霧雨魔理沙。秋の彩りに装われたこの地にあっても、堅固に白黒スタイルを貫く彼女の頬は、既にほんのりと赤い。

鼻をつく酒精の匂い。暢気に一杯ひっかけてやってきた魔法使いへの小さな怒りに、こころの顔上に浮かぶ面がぐるりと入れ替わる。面霊気たる彼女は、六十六の感情を表す面の集合体であり、彼女の感情はこれらの面によって顕わされるのだった。

「緊張してるんじゃないかと思ってな、様子を見に来てやったぜ」

「……問題ない。これは絶好調の表情！」

立ち上がり、ぐっとガッツポーズと共に面を変えてみせるこころ。狐面へと戻った彼女の表情に、魔理沙はそうかと満足げに頷いた。

「頼もしい限りだな。表は満員御礼、千客万来ってやつだ。舞台は十分だぜ」

「本当だよ。もうさつきから悲鳴が止まらないくらい」

続けてひよこりと顔を覗かせたのは、河童のエンジニア、河城にとり。うんざりとした表情で、どこか疲れ気味である。頭の帽子も、どことなくしんなりと力を失っているかのようだ。

「なに言ってたんだ、さんざん出店やらで儲けてるくせに」

「……あのねえ盟友。やるにしたってもう少し面倒のない商売があるだろ？ 寄りにも寄って天狗のお膝元で宴席の元締めなんて、身体がいくつあつたって足りやしない」

「ははは。そんなこと気にしてると禿げるぜ？」

魔理沙に。ぺし。ぺしとの帽子を叩かれ、にとりは憤慨と共にそれを払いのけた。

「生憎こちとら河童だつての。まったく、凶太くて羨ましい限りだよ。……なんでこんな事になつちやつたのかなあ」

「心中察する。これは同情の表情！」

「うるさいよ！」

がつくり項垂れて特大の溜息をつくにとりに、魔理沙はけらけらと笑うばかり。

こころはくるんと面を入れ替え、ふむと首を傾げる。

そも、この妖怪の山、九天の滝下を舞台とし、秦こころの新作公演が披露される運びとなつた発端は、およそ半月ほど前のことだ。

里での宗教戦争の一件を経て、人の感情を学ぶことを己の役目に課したこころは、博麗神社境内に設えた特設舞台で、連日のように奉納神楽を披露していた。宗教戦争とその争いを題材にした新作能楽は広く里の人々にも受け入れられ、神社は時ならぬ参拝客で賑わつたのである。この能楽人気と、それに便乗した博麗の巫女のはしぎ様を記事に取り上げた一部の天狗達

の新聞が契機となり、面靈氣の名はひろく幻想郷じゅうに知れ渡った。

すると程なく、妖怪達の間からもこころの舞台を見てみたいという声が上がりはじめたのだ。古典芸能たる能楽は、人の手によって生まれた、人ならざる者の悲哀や懐旧を伝える幽玄の舞いである。その当事者たる妖怪たちがかつての情景を懐かしみ、欲するのをもまた、当然の事であつたのだろう。

里の商家たちはこれを目敏く見逃さず、妖怪の山への新規客層開拓を企んで特別舞台の開催を持ち掛けた。それに対し、神社での独占公演を求める巫女の抗議や、妖怪の山への警戒も頭わに敵対を表明した聖徳道士や聖尼君が衝突寸前となるとい一幕もあつたのだが——騒動と弾幕と、紆余曲折を経て、最終的にその場を預かることになつたのは河童たちと手を組んだ普通の魔法使いであつた。

「我々が能楽を披露するのは、我々の自由意志によるものだ。どこで公演を行うのかは自分で決める！ 好き勝手に所有物にしようというのなら、我々は断固として戦うぞ！ これは決意の表情！」

憤慨を示して般若面をかぶり、靈力で編んだ薙刀を構えて徹底抗戦の構えを見せるこころに、最後まで抵抗していた巫女も渋々折れることとなつた。仲介に入った里の金貸しが神社での定期公演を約束させたことも要因の一つではあるう。

かくして今日この日、この九天の滝下に設けられた特設舞台に多くの妖怪達が詰めかけることとなったのである。

——どんツ。

「お、時間か」

重々しく響く太鼓の音に、わいわいと言いつつ合っていた魔理沙にとりは揃って顔を上げた。開演を告げるは堀川雷鼓の大大鼓。どん、どおんと打ち鳴らされる低音に、周囲の気配が静かに引き締められていく。

「やばい！ こんな所で油売ってる場合じゃなかった！ 魔理沙、行こう！」

「おい、引つ張るな！ ……じゃあなこころ、しつかりやれよ」

「うむ。心配無用だ！」

やってきた時と同じように騒がしく退出していく二人を、女面を浮かべて見送って。こころはゆつくりと立ち上がった。喉奥の緊張は、いつの間にか薄らいでいる。湯呑を傾けて底に残った水を飲み干し、軽く両の頬を手で叩く。

「……よし」

楽屋の陣幕を出たとたん、流れ落ちる大瀑布の水音が近付いた。清流のもたらしひやりとした気配が、結い上げた髪のうなじを撫でる。

どん、どん、どおんつ。

支度を整え、鏡の間に入ったところを、付喪神達の楽隊の演奏が出迎える。曲目の演奏を引き受けるのは、同じ付喪神のよしみで親しくなった九十九姉妹と彼女らの姉貴分である堀川雷鼓。また彼女達に心酔した、成りたての楽器の付喪神たちもこれに加わっていた。

舞台横の脇座に入り、八橋はこころに視線を合わせて小さくウインク。弁々も小さく頷いてみせた。客席の喧騒はいつしか消え失せ、清廉な気配があたりを包む。

滝の観客達は、一様に石舞台へと注視を注ぐ。集まる視線の中、舞台の四方に焚かれた篝火がぱちりと爆ぜた。どおん。雷鼓の一打に、楽隊は厳かに拍子を奏で始める。

響く笛の音、跳ねる琵琶琴、打ち鳴らされる太鼓。鈴が奏でられ調子を乗せる。

この岩棚には、古くより石舞台の名があった。誰が名付けたかも知られぬその舞台では、古くは天狗達が舞いを奉納し、忘れられた神々が宴を催したとも伝えられていた。

そんな舞台の端、色とりどりの揚幕が持ちあがる。一面に視界が開け、鮮やかな紅葉、青い

空がこころの視界に飛び込んできた。

波濤のごとき滝音の中、面霊気はゆるりと足を運び始めた。所作を保ち、橋懸りから鏡板の前へ。石舞台の中央、四方柱に見立てた篝火の間へ進み出てゆく。

「おお……見事だぞ、こころ！」

「こころちゃん、頑張つてね！」

宙に浮かぶ岩船と、枝上の貴賓席から、それぞれに立ち上がって声をかける聖徳道士と聖尼公。大きく手を振る様子は、我が子の晴れ舞台に我慢できず出しゃばる過保護な親の様相であった。天狗達が眉を潜め、河童たちからは忍び笑いが漏れる。

慌てて従者たちが彼女達をたしなめるが、二人の声援は止まらない。彼女の教育方針を巡って二人が対立するのは、いまや幻想郷の日常茶飯事だ。

当のこころは彼女達を一瞥もせずに狐面をかぶり、石舞台の中央で深く一礼。空にぱっと白い紙吹雪が散り、はらはらと舞台上の少女を包み込んだ。

付喪神たちが演奏を止め、こころは朗々と本日の口上を述べ始めた。

「——これなるは、幻想郷、妖怪の山に伝わる武門の歴史である！」

本日の演目は四つ。天狗たちからリクエストの有った題材を元にして、一番目物、二番目物、神事物、修羅物、狂女物、天狗物、四番目物、五番目物を一題ずつ選び、独自の構成を加えている。いずれも源平の争乱にまつわ

るもので、かつての歴史の争乱に関わる天狗たちが特に好む題材であった。

「では」

差し招いた扇に、ざあと梢が揺れ、色とりどりの紅葉が舞った。

幕を上げるは一番目物、弓八幡。源氏、平家、武運の守護として誉れ高き、八幡神の神徳を讃える演目だ。

舞台上の演者を言祝ぐように、ぱつと白い紙吹雪が散った。付喪神達が息を合わせ、囃子を奏で始める中、こころの頭上には三つの面が巡り、心綺楼の舞は石舞台を彩る。

「御代も栄ゆく男山。御代も栄ゆく男山。名高き神に参らん」

ワキ役、ツレ役を兼ねる直面の謡うたいより、演目が始まる。

本来、能というのはシテ（主役）とワキ、ツレ（補佐役）他によって成立する芸能である。

こころは一人でそれを舞う関係上、面を代役として構成を大胆に変更しなければならない。彼女の並外れた表現力はそれを可能としていた。

「そもそもこれは後宇多の院に仕え奉る臣下なり。」

「さても頃は二月初卯八幡の御神事なり」

心より、心に伝わる秘めた花。緩やかに舞台の上を滑るこころの肢体は、身一つ、所作ひとつで八幡宮の情景と、初卯の神楽を描き出す。

厳めしい顔の大天狗達からも感嘆の声が漏れ、白狼天狗たちも警備を忘れて舞台を見やる。秋天の滝下、面靈氣の舞の見事さに、宴席の観客達はいつしか魅了されていた。



魔理沙が最初に疑念を口にしたのは、演目も中盤に差し掛かった、二番目物修羅物「巴」の最中であった。

「——おい、なんか妙じゃないか？」

主催者席で御馳走を頬張り、盃を傾けていた白黒魔法使いは、怪訝な表情で舞台上の面靈氣へと目を凝らす。

「なにがだい、盟友」

その隣、小さなつぶやきを聞きとがめたにとりも、同じく演目の最中のこころへと視線を向

ける。舞台上、こころの所作は、木曾の山中に女武者巴の霊が源義仲との別れを語る場面だ。平家方の兵を薙ぎ倒し進む巴御前の所作が、地謡と共に舞へと引き継がれる見せ場である。

だが、事前の確認が行われた時と、こころの被る面が異なっているのだ。

「ほら、見ろよ」

魔理沙の指差す先で、こころの被る増面はかたかたと揺れ、弾けるように顰面へ、そして三日月面へと入れ替わる。

演目の中で一度舞台奥へ向かうはずだったこころはその場でぐるりと向きを変え、滑るような足取りで石舞台の中央へと戻った。

水平に伸ばした手の先に扇を構え、舞台上に足を打ちつけはじめる。

「あんな舞い、予定にあつたか？」

「さあ……新作があるって言ってたから、それじゃない？」

「それは最後にやるって話だったろ。それに、リハーサルと手順も違う」

魔理沙が一通り目を通した演目の中に、こんな舞はなかったはずだった。変更を加えるにせよ、直前になって演目旬までも変えるものなのだろうか。二人が揃って首を捻る間にも、こころの舞は様相を変えてゆく。交互に繰り返される足踏みは、徐々にその激しさを増し、だんだんっと力強い打音が響くまでになっていた。

伸ばされた面靈氣の先で、青白く靈力を込めた扇が空を切り、それに重なるように、付喪神達の奏でる囃子も激しさを増してゆく。

こゝろや こゝろ

ただひとつ 鬼の鬼たる 証にて

三日月——この世ならざる神を示す面の下、覗く少女の口元からは荒い息が繰り返され、冷えた滝下の秋のなか、吐息はまるで蒸気のように白く凝る。ゆらりと揺らめく大気は、熱せられた温度差で空気が歪んでいるためか。

ぐらり。深い傾斜に傾いた身体を、足の打音で持ち上げるがごとく。こころの足踏みはなお激しさを増した。だん、だん、だだんつ、流れる水面に小さな波が立つ。大気を震わせ地を揺らす、尋常ではない打音が響く。項うなじの髪留めが弾け、珊瑚色の髪がぱつと散った。

こゝろや こゝろ

こゝろや こゝろ

髪を乱し、汗がこぼれるのも構わずに、こころは一心不乱に石舞台に足を打ち付けていく。繰り返される足打ちで、石舞台を深く地の底まで穿つかのよう。

篝火がばちりと爆ぜ、ひととき大きな炎を上げた。火の粉が煙と共に立ち上り、赤くなったままの小さな木切れが舞台上を転がる。

今宵しきみ闕かくりよに 我が身入れ

幽界かくりよの地に 赴かん

白い足袋が火の点いた木切れを踏み砕いた。足が焦げるのも構わずに、こころは足打をやめようとしな。反動に珊瑚色の髪が舞い上がり、袴には転々と飛沫が飛ぶ。

背後の鏡板、白幕に、ぱつと赤い斑点が散った。

面霊気の足元に赤黒い染みが広がっているのを見咎め、魔理沙は顔色を変えた。

「ちよつと待て、やっぱり変だぞ！」

いますぐに止めなければ駄目だ。理由もなく魔理沙はそう感じ、席を飛び出して。数限りない弾幕ごっこを繰り返して、普通の魔法使いが身につけた危機感知能力——ともすれば命を落としかねない危険な遊びの中で、致命的な危機を察知する嗅覚のままに。

だが。魔法使いが箒を掴んで宙に躍り出たその瞬間。ずん、と叩きつけるような衝撃が、周囲を襲う。

「ひゅい!？」

突き上げるような振動に、バランスを崩しにとりが転ぶ。魔理沙は箒にしがみ付いて難を逃れるが、ぐらつく視界は収まる気配がない。

「っ、なんだ、これっ」

地震を疑う魔理沙だが、違う。立て続けに二度、三度、四度。

凄まじい衝撃が石舞台を揺らす。滝下を穿つ振動は、こころの足踏みに同調して起きていた。

この身 肉身金剛の

骨鬼くがじの主と 成りぬらん

観客達が悲鳴を上げた。軋み揺れる妖怪の山。浮足立った妖怪達が逃げ惑い、混乱が波紋のように広がってゆく。だが、その異変の渦中にあるこころは、石舞台を降りようとはしない。

石舞台に叩き付けられる左右の足はなおりズムを速め、足袋は赤い線を引いて石を穿つ。硬く冷たい石面に叩きつけられて、両の足は赤く染まり、少女のうなじをこぼれる汗は滝のよう

だ。湯気のように立ち上る白い吐息は、喘ぐように酸素を求めて開閉していた。

再び衝撃。

だだん、だんつ、足音に重なり跳ねるような太鼓の打音が滝壺に激しくこだまする。

九十九姉妹、雷鼓。付喪神の楽団は舞手の異常に気付かない。目を閉じ、一心不乱に演奏を続けている——否。

「あいつらも一緒かよ!？」

茸や菌類を魔法に用いる魔理沙は、石舞台上の状況を理解できた。集団トランス。こころの陥っている異状に、同じ付喪神である彼女たちまで強制的に引きずり込まれているのだ。

### 《鬼は鬼》

底冷えのするような詞が、こころの面の口を借りて溢れ出す。

舞台上の少女の周囲に、無数の面が溢れ出していった。

喜、怒、哀、楽。嫉妬、羨望、慈愛、友情、恋慕、憐憫、嫌悪、称賛。

面霊気を形作る六十六の感情が、面の形に実体化し、少女の身体を中心に旋回する。目に見えぬほどの速さで切り替わり続ける感情の坩堝の中央で、こころは忘我の中、只管に足を打ち

付けていた。

面霊気の蹴足が打音を呼び、石舞台に鳴動が走る。

ゆらり。地面に黒い影が差す。いつしか晴天だったはずの空は分厚い雲に覆われていた。足打つところを中心に、石舞台の上空にはやんわりとした虹色の光が溢れ出してゆく。

それは、天上に薄い光の帯を織り上げるように。

何枚も重なった光の波が強さを増し、石舞台の舞手を照らし出した。

《嵬は嵬 嵬は嵬なり 嵬は嵬》

謡とところの一足ごとに、空を歪める力場が生まれ、倍加するように力を増した。

もはや滝壺は石舞台を中心とした台風の如き有様だ。水面は激しく波立ち、木々は暴風に枝を煽られて、生き物のようにうねる。楽隊の音はなお激しく、止まらない。

「くそ！ やめさせろ！ 早く！」

吹き飛ばされまいと張り出した枝にしがみ付き、帽子を押さえて魔理沙が叫ぶ。

面の端から覗くところの素顔は、いつも通りの無表情。

しかし、彼女の面の下からわずかに覗くその口元が、歪んでいるのを魔理沙は見た。ごぼり。

少女の鼻口から鮮血が溢れだす。こころは苦しみ、喘ぎながら、自身でも制御できぬ得体の知れない力に抗っているのだ！

滝壺に閃光が輝いた。神子が十七条のレーザーを放ち、白蓮が魔神経巻を繰ったのだ。しかし破邪の閃光も、大日如来の救世の御手も、幾重にも重なる力場に阻まれ、舞台の中心までは辿りつけない。

——どんツ。

ひとときわ高く掲げた足を、体重を込めて踏み込む。それだけの単純の動作。

その瞬間、こころに呼応するかの如く、面霊気を中心にして先程にも数倍する衝撃が響いた。  
「——なんだ…っ!？」

石舞台に起きた大きな変化に、魔理沙は目を見開く。舞手である彼女を中心にして、石舞台の中央が円形に穿たれたのだ。破壊でも、崩壊でもない。分厚い岩が半径10m以上にも渡って削り取られ、消失したのである。

どう、と周囲一帯を打ち降ろす轟音が響いた。滝壺の水面が大きく揺れ、衝撃波が辺りを揺らす。湖面の船は転覆し、天狗たちを枝の上から吹き落した。阿鼻叫喚の様相の中、あたりに

悲鳴がこだまする。

《鬼は鬼 鬼は鬼なり 鬼は鬼》

《鬼は我 我は鬼なり 鬼は我》

そんな中であつて、忘我となつたこのころの舞いは止まらない。扇は手から取り落とされ、滲む血とともに彼女の足に踏み千切られる。

石舞台に打ち付けられる足の打音は、びりびりと大気を震わせ、篝火が火花を散らし、まるで火山のように燃え盛る。

天上を取り巻く光の帯が一層輝きを増した。

どずんツ……一際大きな衝撃が、腹の底から響き渡る。

石舞台の直上。ヴェールのように幾重にも重ねられた光の力場が、その密度を増し——その中心に、ぽかりと黒い孔が開いた。

皆既日食めいて現れた天の穴。こころの両目が見開かれ、少女の頬を一筋の涙が流れ落ちた。

同時、彼女の周囲を巡り続ける面に、一斉にびしりとヒビが入った。

「アハハ！」

先程の衝撃波と同様の現象が、立て続けに起こる。ずん、ずんと地面が軋み、石舞台に更なる円が刻まれる。階段状になった同心円の中心で、亡失の感情は舞い続ける。叩きつけられる暴風に、観客達は皆顔を伏せ、吹き飛ばされまいと地面の窪みにしがみ付いた。

(あれは……転移門、か……?)

吹き荒れる嵐の中、魔理沙は背筋に響く衝撃に耐え、三角帽子のつばを握り締めて上空の黒洞を見上げた。あれに似た光景を、魔理沙は見たことがある。魔界へと繋がるゲート、あるいは高位の悪魔を召喚する召喚円。

《鬼は鬼 鬼は鬼なり 鬼は鬼》

《鬼は我 我は鬼なり 鬼は我》

《月下 閥しきみに 我が身入れ》

《鬼の 鬼たる 証にと》

《この魂み 一騎当千の》

《ガサラの鬼と 成りぬらん》

地謡が響く。遙か遠方より、望郷の声を呼び戻さんとする。

空に編まれた光の波がひととき強く輝く。天上から押し寄せていた重圧感が消え失せ、一転突然の浮遊感が辺りを包みこんだ。石舞台がうねり、篝火がばらばらと碎けて天に吸い上げられていく。斥力と引力の混交に、急造の柱はたちまち碎けて散った。

九天の大瀑布までもが、重力波にその落飛を留められる。

頭上ばかりが皓々と輝き、滝壺一帯が急速に闇に飲まれてゆく。石舞台上の黒い穴は、光すら捻じ曲げてその中に吸い込んでいるのだ。

「にとり、手伝え！」

「うえ!? ま、魔理沙!? 離し……ひゅぐつ!?」

付喪神たちが成す術なく衝撃に薙ぎ払われる中、魔理沙は歯を食い縛り、箒を掴んで大地を蹴った。有無を言わせず水面のにとりの手を掴み、魔力を集中させて箒の魔力炉に火を入れる。

彗星「ブレイジングスター」。

光と熱の権化となり、魔理沙は石舞台の中央、何かに憑かれたように舞い続けるころへと肉薄する。

「にとり！」

「し」



空へと吸い込まれた。

舞台の中心、無表情のまま血涙を流し、足を踏み続ける彼女は、右手を高々と掲げる。空へ。天へ。遙か彼方を、差し招くように。

瞬間。天の黒洞は二つに割れ、その奥から異様なものが姿を見せる。

——それは、繭に似ていた。

天上の力場と同じ、虹色の糸で編まれた巨大な繭。

それが異邦の存在であり、凄まじい力が注ぎ込まれていることを、その場に居合わせた者たちは、みな理由もなく直感していた。

触れえざる異にして高貴。太古より続く原初の生命。廃れ忘れられた旧き神格。連綿と受け継がれた焦念。ただ一目、目にするだけで畏敬と恐怖を呼び起こす存在。

《嵬は嵬 嵬は嵬なり 嵬は嵬》

《嵬は我 我は嵬なり 嵬は我》

光の繭は、うねり震えながらその質量を増していく。天上の光に包まれてうごめきのたうつ様は、養分を吸って急速に成長する生命を思わせた。

ばきり、ぴしり。過度の負荷に耐えきれなくなったところの面が次々と砕け、空へ、繭へと吸い込まれてゆく。繭の成長に同調し、石舞台そのものにも亀裂が広がりだしていた。

「こころ、逃げろっ!!」

際限なく膨らむかに見えた繭だが、やがて高まる内圧に耐えかねるかのようにその成長を止めた。押し寄せていた重力の乱れもまた、突然消え失せていく。

同時、空の虹色の光は千切れ、光の繭は一転して脆くも爆ぜ割れる。

視界一杯にどろりと液がぶち撒けられ——繭を内から引きちぎって、巨大な構造物が引きずり出される。生物的な繭の外見とはそぐわない、武骨な鋼の塊。崩れ爆ぜるようにして破裂した繭の崩落が石舞台を押し包む。

舞台の中央、こころは変わら<sup>トランス状態</sup>ず神懸かりのまま、己が身を削る舞の最中だ。

「くそっ……!!」

魔理沙は毒づき、咄嗟に八卦炉を構えようとする。だが遅い。威力を絞っても魔砲を撃ち出すには数秒のタイムラグがある。今からでは間に合わない。

白蓮と神子も走り出していたが、なお足りない。



く。

「……………、っ」

堰き止められていた滝が再び流れ落ち、青い水面に白いうねりを描く中。

ただ必死になつて吹き飛ばされまいと、野次馬の妖精たちに混じつて大樹の幹に捕まっていた魔理沙は、きつく掴んだ三角帽子の下、じつと息を殺していた。

「……収まった、みたいだな」

どれほど時間が過ぎたろうか。ごうごうとうねる滝音のなか、魔理沙はそろりと顔を上げる。

宙空の力場は消えうせ、虚空の黒穴も跡形ない。空は何事もなかったように、平穏な秋の青空を取り戻している。

避難していた白狼天狗達が枝の上に身を覗かせ、河童たちが転覆した船をひっくり返し、水面から顔を覗かせる。

はたと気付いて、魔理沙は慌てて立ち上がる。

「そうだ！ 無事か、こころ！」

こころは崩れた石舞台の残骸、水面すれすれに顔を出した岩片の隅で、でんぐり返しを失敗したような格好で仰向けになっていた。乱れた髪に水浸しの衣装。自分がどうしていたのかよく分かっていないようで、困惑を示す猿面をかぶつてきよとんと瞬きをする。

「ん」

鼻と口元には赤い血の跡を残しながら、彼女は案外と余裕があるようだった。無事を示すようにぐっとガッツポーズ。汚れ裂けた袴のままごろんと身を起こす。

「……良かった……」

「こころちゃん、大丈夫!？」

駆け付けた神子は安堵に胸を撫で下ろし、白蓮はこころを抱き起こして、傷の手当てを始める。過保護な保護者達に囲まれ、彼女は困惑と共に少し、安心しているようだった。

ひとまず大事には至っていないことに固い息を吐きつつ、魔理沙はこころの倒れていた場所のすぐ隣に視線を向ける。そこに、石舞台を叩き壊した張本人が横たわっていた。

「——なんだ、こりや……?」

まるで巨大な鉄塊アッシュクレイいや——これを、鉄塊などと呼んでいいものか。

それは武骨な暗灰色アッシュクレイにペイントされた、巨大な人型であった。手足はそれぞれ二本。短い胴体は煤け、きんきんと過熱した装甲板に水に浴びて蒸気を上げている。

全身はおよそ身長4 m半。巨人と呼ぶに差し支えないスケールである。首に当たる部分は無く、胴体に直接、のっぺりとした金槌の頭のような頭部が接続されていた。

分厚い装甲に覆われた太い手足と併せ、魔理沙の記憶の中で最も近い造形のもの、実家で

扱っていた観賞用の西洋鎧だ。

(泥人形……？ いや、アリスのゴリアテ人形の方が近いか？)

物言わず倒れ込む巨人の意匠は、武張った強い威圧感を与えるものである。立ち塞がるものを粉碎し、撃滅するため強力な力の象徴。

警戒を緩めぬまま、魔理沙は巨人に近づく。今にも動き出しそうな熱量を持ちながら、巨人は身動き一つする様子もない。

「壊れてんのか……？」

巨人は各所の関節の間から湯気を立ち昇らせ、一心に内部の熱を排熱しているようだった。どうもとんでもない高熱に晒されていたらしく、近付くだけで肌が煽られるような温度が感じられる。なんの気なしに伸ばした指の先で、落ち葉がちりちりと炙られて丸まっていくのを見て、魔理沙は慌てて手を引っ込めた。

巨人の四角い掌は、五指を広げて上に向けられ——差し招くようにこころの座る場所へと伸ばされている。まるで彼女を求めるようにも。

偶然だろうか？ 物言わぬ巨人を見下ろし、魔理沙はふと誰かの視線を感じた気がして背後を振り向いた。しかしそこはごうごうと流れる滝下の激流。求める誰かの姿はどこにもない。

「もう、こんなに怪我して……無茶をしちゃいけません！」

「ん。……平気。これくらいなんともない」

慣れない回復魔法を使おうとする聖に無事をアピールするためか、こころは自分で自分の頬をつまんでうにーっと伸ばして応えた。ぴよこんと飛び出した女面をかぶり、面靈氣の感情は元通りに正常化しているようだった。

「なあ、今のつて、一体……」

魔理沙は白蓮たちに問うが、二人は黙って首を振るだけだった。長年の道士の研さんを積んだ神子や、魔界への界外修業の経験がある白蓮でも、今さっき起きた事態には心当たりが無いということなのだ。

「……何が何だか皆自分からないぞ！　しかしよく分からないけど面が九つも壊れた。希望の面だったら即死だった！　これは激おこふんふん丸の表情！」

拾い集めた面の破片を懐にしまい、般若面で怒りを示すところ。面靈氣は単一の面に宿った妖怪ではない。本体と呼ぶべき面は存在せず、六十六の面集合体、その全てが彼女である。希望の面を保持する今、彼女の残りの面は自動で修復されるはずであった。

「うひゃー、酷い目にあつたよ。河童が溺れるなんて洒落にもなりやしない……ありや？」

ざばり。揺れる水面から顔を出したにとり、魔理沙たちの前に転がる人型を見て目を瞬かせた。

「なんだ、こっちにも同じのがあるの？」

「……？ おい待てにとり、こっちってどこだ？」

問われ、にとりはまだぶくぶくと泡を立てて濁る水面の下を指差す。

「滝壺の底だよ。みんなで逃げた先に、真上から馬鹿でかい鉄の塊が振って来てさ。押し潰されて死ぬかと思ったよ」

「……もうひとつあるってことか」

確かに先程、光の繭の中身は二つに砕けて湖面に落下した。あれはひとつのものが二つに割れたのではなく、はじめから二体だったのだ。

ますます正体のわからなくなる巨人を見下ろし、腕組みをして唸る魔理沙。一体何がどうなっているのかと首を捻る。

「まだ濁ってはつきりは分からないけど、細かいところは違うみたいだったね。雰囲気はよく似てるけどさ」

にとりの説明を聞きながら、魔理沙は目の前の巨人に近い雰囲気、香霖堂の書棚に見覚えがある事を思い出していた。海外派兵だかんだかという、外の世界の戦争や軍隊について書かれているという、雑誌の類であったような気がする。

「もう一度聞くけど、全然心当たりは無いんだよな？ ころころ」

「何の事だか皆目見当がつかない。いっこうに記憶にございませんでこれについて責任を糾弾すると言うなら我々は徹底抗戦も辞さない構え」

これが決意の表情と狐面をかぶり、靈力を編んだ薙刀を振り出して構えるところに、白蓮はそつと頭を抱えた。一方、隣で神子は我が子の成長を褒め称えんばかりに満足げだ。

「またこの子は妙な言葉遣いばかり覚えてきて……」

「いや、それで良いのだから。自分の手に負えない事まで背負いこむのは衆愚の行だからね」

「神子は自分が完璧だと思つてそういうことを大勢の前で軽率に言うのが為政者として致命的だと思う。ほらほら、これが呆れの表情」

「くっ……」

自覚はあるのか黙る神子。白蓮がそつぽを向いて肩を震わせ笑いを堪えていた。

「まあ、なんにせよこうなると、今日はもうお開きだな」

「なんだとー！ それはどういう量見だ！ 我々の晴れの舞台を邪魔すると言うのか！ 訴訟も辞さない！ これは憤慨の表情！」

般若面と共に両手を上げて抗議するところ。そんな彼女を魔理沙は手で制し、石舞台と滝壺を示して見せた。

「落ち付け。この状況でどうやって続きをやるってんだ」

無惨に崩れ落ちた石舞台、なお濁りをます滝壺、付喪神の楽団は全員水浸しで目を回し、陣幕も舞台もみな水に沈み、無惨な残骸に変わっている。周囲に設けられていた観覧席までもが、避難の混乱と異変の最中に発生した力場によつて半壊状態だ。

「そうですね。ここは魔理沙さんのお言葉通りかと」

ばさりと翼の音。少し離れた湖面の枝に片足で器用に立って、幻想の伝統ブン屋、射命丸文がカメラ片手に割り込んだ。腕の「取材中」の腕章を見るに、彼女もこの舞台の取材中であつたのだろう。

「外縁部とは言え、御山の領内での異変となれば、我々も放置してはおけないのです。妖怪の山にも、まあいろいろと事情がありましてね」

ぺらり。数枚のスナップを撮影しつつ、文は器用に片手で手帖をめくる。

「このまま続けるにしても、大天狗様以下、重鎮の御歴々は皆避難していらつしやる状態です。舞台にしてもすぐに代わりが用意できるという訳でもない。演者のこころさんは御不満もおありでしょうが、改めて日は設けますので、今日は中止という形でお願いしたいところです」

「むう」

まだ不満そうに面をかぶるこころだが、その上でなお舞いを強行しようというつもりはないようだった。無表情に頬だけを膨らませて不満をアピールする。

その後、先程から聖職者にあるまじき責任のなすり合いをしている白蓮と神子を余所に、魔理沙は再度、口を結んで横たわる巨大な人型を見下ろす。

「ガサラの、鬼……?」

ふと繰り返した言葉は、やけにざらついて、喉奥にへばりついた。

二.

招かれし

巡る面におもて

戦術甲冑T A

寄る辺に

繋ぐ過去

想いは遠く

▼  
 思わぬ騒動となった特別公演から数日。人里の繁華街にこのころの姿はあった。

和・洋・中なんでもござれで評判の定食屋「天竺」は、昼前とあつて混雑している。威勢のいい入店の挨拶に、賑わう店内を忙しなく走り回る店員達。

「お待ちどうぞさまです！」

「おお！」

心地よい喧騒の中、二人掛けのテーブル席に座るこのころの元に運ばれてきたのは出来立てのオムライスだ。湯気を立てる黄色い卵と、チキンライスのバターの香り。付け合わせのブロッコリー、ケチャップの彩り鮮やかな皿を前に、火男面も陽気に踊る。

「いただきます！」

ぱちんと手を合わせて深々と目礼し、スプーンを構えてポーズを決めた面霊気は、さっそく卵とチキンライスの味わいに舌鼓を打った。命蓮寺ではなかなか味わえない洋食は、久方ぶりの活力となつてこのころの胃を喜ばせる。

ぱくぱくとたちまち皿上の半分が少女の腹に収まり、このころはようやく一息ついた。

「なんだ、元氣そうじゃない」

馴染みのある声に、こころが啞えスプーンのまま振り返れば、新しく暖簾をくぐってやってきたのは、ひとかたまりほどの雲を引き連れた青い頭巾の尼僧だった。命蓮寺の雲居一輪と、相棒の雲山入道である。

「……おばちゃん、いつものやつお願いね！」

「あいよ！」

流れるような動作で厨房の店主にビールと唐揚げを注文すると、一輪はトレードマークの頭巾を脱いで、こころの向かいに腰を下ろした。

「なんだか大変だったって聞いてたけど。怪我もしたんでしょう？」

大丈夫なの？ と一輪。公演当日、彼女は寺で留守番しており、戻ってきた聖達から一部始終を聞いたらしい。こころが怪我をしたと聞かされ、いろいろ案じていてくれたようだった。

「あの程度の困難はよくある！ 絶対に負けたりしない！ これは決意の感情！」

「……まあ、平気ならいいんだけど。姐さんも心配してたからさ」

胸を張って狐面を示す面霊気に、一輪は苦笑。出てきた大ジョッキをあつという間に空にしてみせた。

「白蓮は、私に過保護すぎる。……神子もそうだけど」

「ふは。そう言わないの。姐さんもこころちゃんのことを大事なのよ」

昼も日中、混雑する定食屋で呆れるほど見事に不飲酒戒を破る不良尼に、隣で洗い顔をする雲山。その口にひよいと摘み上げた唐揚げを押し込んで黙らせ、一輪は即座にお代わりを注文。

二杯目のジョッキを傾けつつ、

「で、あれって一体なんだったの？」

「私にも良くわからない。魔理沙は、私が幻想郷の外から何かを引き込んだんじゃないかと言っていた。が、そう言われてもどういふことなのかさっぱり分からない」

「ふうん……」

あの日。石舞台の上で舞っている間の記憶が、こころにはない。演目の三番目を途中まで進めたあたりで、途切れるように意識がなくなっていた。

覚えてるのは舞台から投げ落とされ、水面に浮かんでいたのを助けられたところからだ。岩盤に叩き付けられた足はズタズタの大怪我で、髪も乱れ、吐血鼻血で顔中ひどい有様であったらしい。そのあたりも、あまり明瞭な記憶が残っていないかった。

「こころちゃんは、心当たりはないの？ その、……なんだっけ？」

「ガサラの舞」

「そう、それ。その舞の事。何か知ってるんじゃないの？」

「皆目わからない。これは困惑の表情」

ぶるぶると首を横に振り、こころは猿面を見せて肩を落とす。

面霊気・秦こころは、歌劇の祖である秦河勝に依って造られた六十六の面の集合体である。他の付喪神にも言えることだが、道具を依代にして生まれた妖怪は、核となった道具の機能を生まれながらにして自在に使うことができる。

こころにも舞踊に属する技術や知識は余すところなく備わっており、仮に不足しているものでも必要とあらばすぐに学び、身につけることができた。今のこころのレパートリーには、現代に蘇ってから得た演目も多い。

だが。あの時、あの場でこころが舞った演目は、当のこころにもまったく見当が付かなかつた。何をもって創られた、誰の手による、何のための演目なのか。そして、知識のないはずの自分が、何故それを舞うことができたのか。それらが全て、抜け落ちたように欠けているのだ。

ただ一つわかるのは、ガサラの舞というその名前だけ。

「ガサラ……ガサラねえ。十二神将とちよつと似てるけど」

机の上にグラスの水滴で婆沙羅の字を書き、一輪はひよいばくと唐揚げを食べては次々にジョッキを空にしていく。だいぶんと顔が赤く酔いも回っているようだが、口振りもしっかりしたものだ。雲山も諦めたのか、一緒にジョッキを呷っていた。

「こころも卓上に手を伸ばし——いつの間にか空になっていたグラスを見て首を捻る。

「折角の特別公演、気合を入れていたのがあんな感じで終わったのはとても残念だ。これは後悔の感情」

「うーん。……まあ、そんなに気を落とさないで。また機会もあるわよ、きつと。ね？ ほら、スマイルスマイル」

スプーンを銜えたままテーブルに突っ伏すところに、一輪はウインクして、自分の口の左右の端を人差し指で持ち上げてみせた。にゅいと手を伸ばした雲山が、しゅわしゅわと炭酸で弾ける手でそつとこころの頭を撫でてくれた。

無表情のこころの口元が、ほんのわずか、緩む。

「ふは。……おばちゃん、もう一杯頂戴！ ……あー、そう言えばさ、その騒ぎの巨人……っ  
ていうか、ロボットっていうの？ なんだか、河童のところまで調べてるって話だったわよね」

「なんだと!？」

がばり。突然身を起こしたところに、テーブルの上の皿が揺れる。世間話のつもりで話題を振った一輪は目を丸くし、弾みで落ちそうになったジョッキを雲山が慌てて受け止めた。

「それは本当か!？」

「う、うん。……なんか、天狗が置いてった新聞に書いてあったわよ」

勢い込んで訊ねるころに、一輪は困惑しながら記事の内容を教えてくれた。件の舞台での事故後、妖怪の山の天狗達は原因究明の調査に乗り出した。河童たちが主導となつて、外界よりの来寇物である鋼の巨人を接収。水没した機体を分解して修理・解析を試みているという。新聞そのものは朝餉の用意で焚き付けに使つてしまったらしいが――

「それはいいことを聞いた！ 今すぐに向かうことにする！ 私の舞台を邪魔したものの正体を、是が非でも突き止めなければならぬのだ！ ——これは確固たる決意の表情！」

「え、あの、ちよつと、こころちゃん？」

「ごちそうさま！ お代はそこにおいておく！ 残りは食べてもいいぞ！ では！」

綺麗に、半分だけ食べ掛けのオムライスを残し。まるで嵐のように店を飛び出してゆくころを呆然と見送り。

一輪は、七杯目となるジョッキ片手に、雲山と顔を見合わせるばかりだった。



九天の滝の南西、清流の中に柱状節理の火成岩が立ち並ぶ一角。

曲がりくねった道と激しい高低差で、天然の迷宮と化した岩場を抜けた先に、河童たちの棲

み家は存在した。

玄武の沢の支流にあたる水系には、霧の湖に匹敵する巨大水路が築かれ、流れの緩やかな淵に沿うようにいくつもの洞窟や建物が立ち並んでいる。半水中に築かれたこの建築群こそが幻想郷最大の河童達の集落であり、工房と住居を兼ねた彼等の一大拠点であった。

「だーかーらーあ！ たとえ盟友だつてここは立入禁止だつて言つてるじゃないか！ 聞き分けのない奴だなあ」

集落のなかで一番大きな建物の前に、聞き覚えのある声が聞こえる。

紅葉まぶしい秋の空、眼下に押し問答を続ける見覚えのある背中を見下ろし、こころはふむと首を傾げた。くると女面が頭上を巡る。

「生憎、諦めの悪さは折り紙付きだぜ。通してもらえないまで帰らないからな」

「あーもう、勘弁しとくれよ魔理沙……」

ずらり並んだ作業着の河童たちを前に、玄武石のアーチの前で押し問答をしているのは、予想通りの白黒魔法使いの姿であった。

「む。先客がいたか」

ふわりと降り立つ面霊気に、魔理沙はようと片手を上げる。

「なんだ、こころじゃないか。もう怪我は平気か？」

「勿論だ！ 河童の大工房というのはここでいいのだろうか」

「そのようだぜ。その様子じゃお前も同じ用事らしいな」

現れた新たな来訪者に、にとりはますます洗面を深くする。

「ちよつと、魔理沙はなんとなくわかるけど、なんで面霊気まで来るのさ」

「それは勿論、私の晴れ舞台を邪魔した原因について知らなければならぬからだ！ 新聞で読んだぞ。ここに例のロボットがあるそうだな！ あれについて私は詳しいことを知る権利があると思う！ 教えてもらうまで帰らないぞ！ これは要求貫徹、断固闘争の表情！」

「おー！ そうだそうだ！ 早く中に入れろー！」

びしりと天を指差し、こころは力強く宣言する。便乗してシュプレヒコールを上げる魔理沙に、にとりは大きく肩を落として盛大なため息。

「……あーもう……くっそ忙しいってのにまったく次から次へと……。あのねえ、誰が何と言おうとここは駄目なの。御山の機密とか、他にもいろいろあるんだから！」

「そんなケチくさいこと言うなよ」

「そういう問題じゃないんだってば！ わかるだろ？ 魔理沙だって、自分の研究のある部屋には気安く他人は入れたりしないじゃないか。それと同じ！ 大工房は部外者立入禁止なの！ 両手と背中マジックハンドで×を作るにとりに倣って、他の河童たちも揃って両手を交差

させ、べーっと舌を出す。意地でも入れてなるものかという固い決意だ。

一致団結の河童たちを示し、魔理沙は首をすくめてみせる。

「さつきからずつとこの調子でな。参るぜ」

「成程。……聞く限り、魔理沙も例のロボットの件で来たのだろうか」

「ああ。あれはいろいろ面白そうだったからな。私もぜひ調べてみたい。昨日も一昨日も格納庫まであとちよつとだったんだが、惜しかったぜ」

「あんだけ念入りに追いつ返されてまた忍び込もうとする神経が良く分からないよ……」

肩を落とすにとりに、魔理沙はけらけらと笑いながら、

「ははは、にとり、お前はもうちつと私の諦めの悪さを知らないとだぜ。パチュリーとか最近目も合わせてくれなくなつたからな」

「……それはなんかもう取り返しが付かなくなる前に本気で謝りに行つたほうがいいんじゃないかな」

「ま、なんにせよだ。追いつ返すのは勝手だが、そんなら私は私のやり方で忍び込むだけだぜ？ やるといつたらやる。なあ、こころ？」

「うむ。実力行使も辞さない！ これは毒食わば皿までの表情！」

魔理沙はぐいとこころの肩を引き寄せる。我が意を得たりと、こころもぱつと扇を広げて賛

同を示した。

「……そういうのは交渉じゃなくて脅迫って言うんだよ」

「お前のものは俺のもの、俺のものも俺のものの表情！」

「うるさい！……はあ……いいよもう」

特大のため息と共に項垂れたにとりは、ひらひらと手を振って河童たちに指示を出した。驚いて飛び上がる彼女たちに、水棲のエンジニアはしようがないだろ、と渋い顔。

「わかったよ。入れてやる。……言っとくけど、今回だけ特別にだからね！ 私が入るなって言った部屋には入らないこと。勝手にそこらへんのものに触らないこと！ あと、どんな小さなものでも、工房の外に持ち出したりしたらただじゃおかないからな！ 特に魔理沙！」

「お、おう。勿論だぜ」

背中マジックハンドで胸倉を掴み、噛み付かんばかりの剣幕のにとりに、さしもの魔理沙も気圧され気味だ。絶対だからね！ と念を押し、ようやくにとりは二人を開放する。

「サンキュな。魔法ならともかく機械に関してはお前のほうがよっぽど専門だもんな」

「つ……またそういう事をさらつと……！ ってかお前達、笑うな！ あーもう！ ほら！ 入るんなら早くしなよ！ こころも！」

「承知した。感謝するぞ！ これは喜びの感情！」

「早くしろっての！」

左右の手に扇を広げ、火男面をかぶって花火まで上げ、全身で喜びを示していたころに、とりの怒声が飛ぶ。

何故怒られるのだろうかとう宙空を見て首を傾げつつ、ここからは後に続いた。



玄武の甲のごとき六角模様の畳岩が広がる集落の中央。並ぶ巨石を流れ落ちる溪流の真ん中に、大工房は存在した。鉄筋コンクリート5階建ての巨大な建物の通路を、にとり達に先導されて、魔理沙とここへは進んでゆく。

水圧で稼働する重機、精密加工用の旋盤、唸りを上げる水冷メインフレーム。

河童の発明が所狭しと詰め込まれた工房の物珍しさに、興味津々とはかりこころの頭上を翁面が旋回する。時折、さも自然な動作を装ってふらりと通路を外れそうになる魔理沙を、目敏く見つけたにとりが伸びたマジックハンドで捕まえて引き戻していた。

河童の大工房は、河城を始めとして沢崎<sup>さわさき</sup>、水菱<sup>みずびし</sup>、石河<sup>いしかわ</sup>といった河童たちの有力支族が連名で設立した施設である。元来、ギーク気質が強く共同作業を不得手としていた河童たちである

が、守矢神社主導の事業振興をきっかけとして、最近では若い世代を中心に組織的な技術開発が行われるようになってきているのだという。

「素晴らしいな。こんな場所が幻想郷にあつたのか。これは感嘆の表情！」

タラップの下、格納庫でいつぞやの三平ジェットが解体整備されているのを見つけ、こころはふむと一人頷いてくるりと面を回す。

「まあね。……って言っても、めいめい好き勝手なことしてるだけだけど」

そも、河童が作る機械というのは、彼女達の能力の延長線上である。大半は規格からなにから全てがワンオフ品であり、作成者が違えばネジの口径からピッチから全部がばらばらということも珍しくない。整備性や汎用性など二の次三の次で、自分にさえ使えれば無問題というのが常識であつた。

人里との交流に際し、少しずつ統一規格の導入が勧められているのだが、いまだ浸透しているとは言い難い。

それでも、個人の工房では手に負えないような大作業や大掛かりな加工に関して、共有で作業場をつくることの利点は理解されつつあつた。

「——なにしろ、何もかも初めてのことばかりでさ。うちの工房だけじゃ色々限界で、ここを借りてるんだけど、正直に言えば行き詰まってるんだよね。それなのに上の連中は無茶ばつ

かり言うし……どうしろってのさ」

はあと長い息を吐いて、にとりはふるふるすると首を振った。思考を切り替えるようにぐりぐりと手のひらの根元でこめかみを揉む。

かつん。足音の反響が変わる。長い通路を抜けた先には巨大な空間が広がっていた。天上に大きな水動ウインチャクレーンを備え、床には水圧のジャッキも配備されたここは、河童たちが大掛かりな発明品を整備する作業場兼格納庫である。

「おー、これか？」

作業場の中央、緩衝材を挟みうつ伏せに横たえられている鋼の巨人を見下ろし、魔理沙が声を上げた。石舞台を叩き壊し水柱を上げた巨体であるが、いざこうして大人しく安置されていると、存外に慎ましく感じられた。

あれだけの異変を引き起こした原因とは、とても思えない。

「思ったより小さいのだな」

「……大体4〜5mつてどこか？ ロボットつてやつはもつとでかいもんだと思ってたが」

ロボットとは、チェコ語の「労働」を語源に持つ人型自律機械の名称である。

幻想郷では一部の好事家が名前を知っている程度の存在だったが、外の世界よりやってきた守矢神社の早苗がめっぼうこれに詳しく、布教と称して里での信者獲得の傍らに関係書籍をば

ら撒いたりしたため、現在では幻想郷でもそれなりにその存在が知られている。

「早苗が言っていたのは架空のお話じゃないか。空に聳える黒金の城とかさ、三つのマシンが合体とか。そういうのと一緒にしちゃダメだよ。こいつは外の高度な技術で作られた、実用的なロボットなのさ」

「ふむん。……良く分からん」

「右に同じの表情！」

「……いやまあ、別に期待しちゃいけないけどさ。少しは興味深そうにしなよ二人とも」

石舞台での騒動翌日。いったん河城の工房に運び込まれていたこのロボットは、周囲の強い要請でこの大工房へと移されていた。にとり個人には手が負えなかったというのももちろんだが、大勢の河童の前に突如出現した外の世界の機械に、多くの河童たちが興味を示したのである。大工房での調査と管理は、放っておけばにとりの工房に入り浸ろうとする他の支族たちに辟易した結果の、妥協点なのであった。

「なににせよ。でかいってことはそれだけ重くなるってこと。1辺10センチの豆腐なら皿に乗せるのはなんとでもなるけど、一辺1mの豆腐は水から出したら崩れちゃうだろ？」

物質の重量は体積に比例するが、その強度は断面積に比例する。人間の身長が2倍になったとすると、重量は2の三乗の8倍になるのに対し、筋力は2の二乗、4倍止まりだ。

モノは大きくなればなるほど、自重を支えることが難しくなる。そこからすれば、この鋼の巨人のサイズも驚愕に値するものであるという。

「ふむ……」

にとりの解説に合わせ、もつともらしく頷いてみせるころだが、かぶっているのは困惑を示す猿面である。

「まあ、こいつは見た目よりはずいぶん軽いんだけど……早苗が言うような空飛ぶ正義のスーパーロボットって感じじゃないんだよねえ。一応、動力は生きてるみたいなんだけど」

「そりゃ凄いい。じゃあ動かせるのか？ コントローラーとかあるんだろ？」

「……簡単に言ってくれるねえ」

ぼりぼりと頭を掻き、にとりはガレージ脇の作業台から食器をどけ、キーボードを操作する。ディスプレイの後ろから長く伸びたコードは、大工房の奥に安置された水流稼働電算機と、巨人の首各所に伸びるケーブルと繋がれていた。

ごぼりと循環水流の勢が増し、電算機の筐体が唸りを上げる。にとりの前にある液晶モニタに白黒の文字列がばばっと流れ、程なく、格納庫中央でうつつ伏せになっていた巨人の背中が煙を吹いた。

ラムネのピンを空けた時のような音を立て、巨人の背面にある装甲がぐんと持ち上がる。

「おおっ!？」

「こころは大飛出の面を跳ねさせて飛び退く。警戒も露わに靈力で編んだ薙刀を構える面靈氣を余所に、にとりはばくりと口を開けた巨人の背中に飛び乗り、暗灰色ダークグレイの装甲の奥を示してみせた。

「こいつのコントローラーはこの奥にある。外部から命令を与えるんじゃないやなくて、中に乗り込んで動かすやつみたいなんだ。……でもね？」

巨人の内部は空洞になっており、中には丁度人が一人、納まる程度のスペースが空いている。良く見れば、手足をそれぞれ納める場所もあるようだった。装甲の隙間に上半身を突っ込み、にとりは手袋の指でちよんちよんと空洞の内壁を指差す。

「……ここ、読めるかい？」

「む」

「私にも見せて」

「こころと魔理沙は顔を寄せ合って、装甲板の内側に並ぶ文字列を覗き込む。

七七式戦術甲冑 雷電

型番: 七七式戦術甲冑 Type 17 《RAIDEN》

Serial No. 13225DAST3BTA

製造：豪和インストルメンツ

「たぐていかる……あーまー？」

Tactical Armor

「……戦術甲冑。鎧ってことか」

「そう。略称TA。こいつはロボットって言うよりも、人間が着る、動く鎧なんだ。サイズもその方が納得いく。外の世界の企業が作った新型兵器らしい」

「兵器！ 外の世界ではこんなのが戦っているのか。これは驚愕の表情！」

ぐるんとこころの顔を回る大飛出の面。

「なんだか操作もえらく面倒くさそうだな」

機体の内側に並ぶフットペダルや各種コンソール、操縦桿の各指にあるトルボタンに、多種多様なレバーハンドルを眺め、魔理沙が呻く。

早苗の「資料」では、パイロットは左右のレバー二つで自由自在に巨大ロボットを操っていたが、そんな単純なものではないらしい。

「これだけのものを動かすのはそれだけ大変だってことだろうね。人間は面倒な事ばっか考えるからさ。姿勢制御とか、動作とか、調整とかも自分でやらなきゃいけない。たぶん、半分自

動化するプログラム……電子式の動作命令があつたはずなんだけど、あの時の衝撃だか熱のせいかなんかでぐちゃぐちゃでさ。修復しようにも、なにがなんだか全然分らないし」

「昨今、幻想郷でも無縁塚からもたらされた機械を通じて、「電子式」への命令を打ち込む特殊な文法——プログラム言語の存在が知られるようになった。河童たちの間でも独自に発達した電算機を用いて電子式の解析・開発が進められている。龍下<sup>たつした</sup>などはそれで知られた河童の支族であるが、彼らをもつてしてもこの戦術甲冑のデータは目下、解説不能の嵐である。」

「私も外の世界の機械は一通りばらしたことがあるけど、豪和なんて企業は聞いたことないんだ。よつぼど特殊な開発環境なんじゃないかって想像するのが精いっぱいでき。本当、どうしたもんかなあ……」

「ふむ……」

「こころと共に興味深げに巨人を覗き込んでいた魔理沙だが、やがてポンと手を叩いて、一人領きにとりのほうを振り返る。」

「よし、じゃあひとつ動かしてみようぜ。それがいい」

「「は？」」

「一斉に河童たちが声を上げる。」

「それじゃあ早速準備だと、制止も振り切つて近くの工具箱に顔を突っ込み、中身を漁り始め

る魔理沙に、にとりが大慌てで駆け寄った。

「なに言いだすのさ！ まだ全然解析も終わってないんだよ、無理に決まってるじゃないか！」  
 「動いたって事は動力はあるんだろ？ それに操作もできる。お前のことだ、動かないものを見せたりしないからな」

「そりゃ一応、できる限りは修復したけどさ……」

「なら問題ないじゃないか。あれこれ悩むよりもまずやってみないと。なあこころ！ お前も見てみたいだろ、こいつが動くところ！」

「無論だ！」

「いや、そういう問題じゃないだろ!? っていうか勝手に触るな！ おい誰か、その馬鹿を止めろ！」

にとりの背中からマジックハンドが伸びる。実に身勝手な理屈で準備を始める魔理沙を捕まえようとするにとりだが、魔理沙は鼻歌と共にそれらをかまし、逆ににとりの目の前へ。

「まあそう言うなって。私も手伝うぜ」

「だから、それが——ッ」

歯切れの悪いにとりに、魔理沙は目を輝かせ、な—な—とせがみ続ける。「動かそうぜ」「駄目だって」と子供じみた言い合いが始まるのを見ながら、こころはふむと首を傾げ、狐面を頭

上へ。

「……成程。理解したぞ！　これがツンデレの感情！」

「違ああああう！」

肩を震わせて叫ぶにとりの背後で一斉に頷く河童たち。

陥落は概ね、時間の問題と見えた。



案の定、にとりの抵抗は10分も保たずに押し切られ。強引な魔理沙のアプローチに根負けする形で、一同は大工房の裏手にある屋外の大規模作業場へと場所を移していた。

雑草が所々に目立つ程度の更地であるが、なかなか広い。ここは大工房で製作・補修した大掛かりな発明品の動作テストを行う区画であり、時には弾幕の練習にも使われているという。河童の道具が基本、水中での動作を前提にしているとはいえ、陸上での動作を確認しないわけにはいかないのだ。

広場の端、重機を使って移動させられた戦術甲冑は、その背中を開いて待機中。足を折り曲げて座る姿勢で乗降用のタラップを展開している。動力のバッテリーには太いケーブルが接続

され、妖力発電炉が充電に唸りを上げていた。

「……S I V 設置確認、アクチュエーター係数よし、リンク接続……」

「なあ、まだ終わらないのか？ ややこしいのは適当に切り上げてさっさとやろうぜ」

「好き勝手言うなあつ、もうっつ！」

戦術甲冑の頭部背面に接続したモバイルデバイス片手に、じつとデータをチェックしていたにとりが拳を固めて叫ぶ。その隣で魔理沙は豊かな金髪を後に束ね、スカートを脱いで作業用のツナギに着替えて待ちきれない様子だった。ぐっぐつと手足を伸ばし、入念に準備運動を繰り返す。

『動かすたって、パイロットはどうすんのさ！』

『当然、私がやるぜ』

無茶極まりない論調ではあったが、もはや河童達に反論の気力はなかった。諦めの表情でデバイスのケーブルをちぎり、にとりは拡声器で皆に指示を飛ばす。

『あー、もう知らない！ 皆、パイロットの要望だ！ 細かいテストは全部すつ飛ばしていいから！ 最低限、気密と安全装置の確認！ それと、モニタは全部取るから中央電算機の稼働

枠回してもらって！ それ以外の手の空いてるのはとりあえず非常時に備えて待機！ あとそ  
つちの野次馬！ 見物するのはいいけど邪魔しないで離れてろ！ 酒盛りも禁止！』

大工房に運び込まれたこの謎の機体については他の河童たちの間でも噂になっていたようで、  
遠巻きに見物に訪れている者たちも少なくなない。

「大変そうだな。これは労わりの表情！」

「……誰のせいだよもう……ホントさ、私こういうの向いてないんだってのに」

「そうか？ 結構、お似合いだと思うけどな」

準備を終えた魔理沙は、戦術甲冑の背部にあるタラップに脚を掛けて言う。しかしにとりの  
顔色はいまだ不安げだ。

「ねえ魔理沙、くれぐれも無茶はしないでよ」

「任せとけ。魔理沙さんの華麗な操縦を見てろってところだな！」

「別に魔理沙の心配はしてないよ。無茶してそいつを壊されるのが嫌なだけだってば」

「……おう」

素で言い返され、魔理沙は釈然としない表情のまま甲冑に乗り込む。少女の体が見えなくな  
ると、にとりがモバイルからコマンドを打ち込むと、背中 of 装甲板が元の通りに閉じた。鋼の  
巨人の中に、白黒魔法使いが取り込まれていく。

「なにやら棺桶のようだな」

『やめてよ、縁起でもない。……どうだい、魔理沙』

拡声器越しに呼びかけるにとりに対し、モバイルの音声出力からくぐもった声が聞こえてくる。甲冑内でも外部の音は一応聞こえるようだが、内外の通信系統は死んでいるらしい。

『ふむ。……これに乗ってたやつは、私より年上っぽいな』

『ああ、そっか。操縦者の体格差のこととか考えてなかった。ペダルなんかの位置はある程度調整が効くと思うけど』

『みたいだ。……よし、行けそうだぜ』

魔理沙の応答と共に、戦術甲冑が低い唸り声を上げる。同時、モバイルの黒画面に、洪水のように白い文字が流れはじめた。画面を覗き込みつつ、にとりは隣の助手河童と何事か専門的な会話を交わす。

あのデバイスにはこの巨人の起動時に必要な情報を吸い上げているという事らしいが、こころにはさっぱり判別がつかない。手持ち無沙汰で左右の手に扇を広げ、魔理沙に応援を送る。声が届いていないとするといささか滑稽だ。

『ハッチは閉じたね？ 出てくる警告とか確認のコマンドは全部すっ飛ばしていいから、上下キーとエンターだけ覚えて。機動準備はこつちでやるから、魔理沙は搭乗セフティロックの解

除を。右上の鍵を押しこんで回してから、手元のボタンを左右同時に押し、ペダルを踏み込む。……わかる!?』

『おう』

しばしの間をおいて、甲冑の背中で白い煙が噴き上がった。小さく振動した巨人がわずかに身じろぎをする。背の部分からはゆらりと排熱の陽炎が立ち上り、モバイルの白文字の奔流がさらに勢いを増した。河童たちが慌てて甲冑の背後によじ登り、充電用ケーブルを切断、回収してゆく。

「おお、いよいよ動くのか!」

大飛出の面がこころの頭上に飛び出した。面霊気の驚きを余所に、戦術甲冑の起動は進む。

『機動シークエンス全部省略。モニタ班、データは一文字も見逃すなよ! そっちの野次馬、早くどけての! 巻き込まれても知らないからね! ——各員注意! 動くよ!』

にとりの指示に、河童たちが忙しく動き始める。

鋼の巨人の頭部で、アイカメラがきゅいんと動く。

「……む?」

鋼の巨人の機械の一つ目。その視線が、自分を捉えるのを、こころは肌で感じていた。

巨人の息吹と共に、その身体が大きく脈打ち、眠りより目覚める。

『準備完了、つてな。いくぜ』

くぐもつた魔理沙の声と共に。しゃがみ込む姿勢で待機していた巨人が、煙を吹きその場に立ち上がる。ぐんと膝を伸ばして起き上がる動作は、その巨体に比べると異様なほどに俊敏だった。ばしゅん、と伸ばしたゴムを叩き付けるような、独特の機動音が周囲を揺らす。

「……うおおおおー!!」

見物の河童たちから歓声が上がる。こころの頭上では翁面と福の神の面が忙しなく入れ替わった。屹立した巨人は、身長4m半の暗灰色の体躯で、重々しく大地を踏みしめる。

一同が固唾を飲んで見守る中、戦術甲冑は踵を滑らせるように脚をゆつくりと前へ踏み出した。静から動へ、前へ進む一步が巨大な身体を軋ませる。片足の不安定さに、一旦はふらりと傾きかけた巨軀を、さらに踏み出す反対の脚が力強く支える。

ガスタービンが出力を上げる。右、左、右、左。ばしゅんと唸る機動音は連続し、その動作はみるみる早まり巧みさを増してゆく。巨人の歩みは武骨な外見からは結びつかない生物的な印象で、いささか気持ち悪さすら覚えるほどに滑らかだった。それは、この鋼の両足が左右の体重を移動と共に前に押し出す動的歩行を可能にしている事の証左に他ならない。

分厚い装甲板を軋ませることもなく、歩行から走行へ。

巨人は幻想郷の大地を滑らかな動きで走り出した。こころは慌ててその後を追う。

「ずいぶん速いのだな！」

『魔理沙、もつとゆつくりでも平気だよ！』

河童たちと共に戦術甲冑に併飛行しながら、にとりが拡声器に向かって叫ぶ。

身長4.5mの戦術甲冑、一步の歩幅は約3mだ。人間の早歩きとほぼ同じペースで、足を踏み出す巨体。その速度は分速にして500m以上——時速30kmを超えていた。

ばしゅん、ばしゅんと巨体には似つかわしくない軽い足音が、3tの機体を軽々と運ぶ。またたく間に大工房前の平地を走破し、その先にある数十センチの段差をもともせず駆け抜けてゆく。

「素晴らしい！これは感服の表情！」

こころはばつと扇を広げて驚きを示した。かぶる面は喜びを示す火男。思わず七色の火まで吹いて全身で感服を表現する。

が。鮮やかな操縦もそこまでだった。こころが喜びの舞と称した応援を始めたその瞬間、巨人は蹴躓くように足元の段差を踏み外したのだ。がくと傾いた巨軀を支えんと、反対の足が強く地面を蹴るが、今度は反動が強すぎ、機体は宙へ跳ねあがる。

崩れたバランスを立て直そうとするたび、戦術甲冑は右に左に激しく揺れ、千鳥足のようにコースをずれて動き始める。

「魔理沙！……ああもう、言わんこつちやない！」

にとりは拡声器を放り投げて飛び出した。戦術甲冑は酔っ払ったように斜めに傾いたまま迷走を始めた。倒れ込んだ身体を支えこもうと大きく足を開いて、今度はその反対側にぐらんと傾く。おぼつかない足取りは地面の些細な段差でも躓き、制御を失った両腕はぶるんぶるんと振り回された。背部のケーブルが数本千切れ、装甲が軋む。

遠くの見物客から悲鳴が上がった。

『魔理沙！ 落ち着いて！ 足を踏ん張っちゃダメだ！』

暴れる戦術甲冑に並走し、にとりはデバイスに必死のアドバイスを飛ばすが、巨人の暴走は止まらない。そのまま蛇行し、大きく進行方向を変えて——、あろうことか見物の河童たちが並ぶ方へと突っ込んでゆく。

「これはまずい！」

危機を悟り、全速力で見物席へと走り、こころは両手に靈力の薙刀を編み上げて、甲冑の間に割り込まんとする。

青褪めた河童達が蜘蛛の子を散らすように逃げる中、戦術甲冑は激しく転倒した。時速30kmの速度はそのままに、頭から盛大に地面に突っ込んでゆく。頭でハンドフリップをするような無茶苦茶な機動で跳ねた甲冑が、見物席へと跳ね跳ぶ。

にとりは悲鳴を上げてリュックの緊急レバーを引いた。

「っ、間に合えええっ！」

にとりの背中のリュックから巨大なアームが繰り出され、戦術甲冑の腰と脚をひつつかむ。重量3t、時速40kmの疾走。怪力を誇るアームの荷重ぎりぎりを持つても、どうにか押し止めるのが限界だ。アームが白煙を上げて限界を訴える中、見物席に激突するぎりぎり、戦術甲冑の暴走は押しとどめられた。

「ふう……」

抱えた戦術甲冑をうつぶせに倒れ込ませたところで、にとりのアームが煙を吐いて動作停止。危機一髪で惨劇は回避されたことに額の汗をぬぐうにとり。

緊急機構が起動したか、ぶしゅうと背中から煙をあげ、甲冑の背面が開く。小刻みに肩を震わせ、魔理沙がそこから這い出してきた。

「……魔理沙、平気かい」

「……………」

不安げな顔で駆け寄るにとり。こころもそれに続く。魔法使いはおでこのあたりに血を滲ませているが、大きな怪我は見当たらない。まずはそのことにほっと安堵するにとりだが——  
真つ蒼な顔をした魔理沙は、肩を震わせて俯くと、そのまま口元に手を当てて。



ひとしきり呻いた後、魔理沙はけふ、と咳を一つ。

「あー……まったく、ひどい目に遭ったぜ」

「それ言いたいのはこっちだよ。だからやめとけって言ったんだ」

「いや、だってなあ……あんなに揺れるとか思わないだろ」

うんざりと戦術甲冑を見上げる魔理沙。上下左右の振動が絶え間なく続き、密閉環境に視界と五感が圧迫され、なにより両足の着地の感覚と見える光景が一致しないため、三半規管にダイレクトに影響が出るらしい。

さながらミキサーの中身といった様相であり、魔理沙の醜態はその結果であった。

「欠々に、初めて空を飛んだ時の事を思い出したぜ……」

まだ具合悪げに口元を押さえ、普通の魔法使いはげっそりと呻く。

魔理沙には長年、箒上で三次元での弾幕ごっこに明け暮れてきた自負があった。縦横無尽に空を飛び回る中で戦闘起動も経験し、回転にも重力加速にも十分に慣れているはずだった。それがこの有様である。

「……こんなもん、どうやって乗るってんだ」

「分かってたら私だってなんとかしてるよ。……断言はできないけどさ、たぶん、動かすには色々装備やら準備やらが足りてないんだよ、こいつにはさ」

ばし、とにとりは暗灰色の装甲板を叩く。

戦術甲冑。この兵器は魔理沙は言うに及ばず、にとりも他の河童たちもまるで聞いたことのないまったくの未知の外來機器である。大工房の河童たちが顔を突き合わせてはや三日が過ぎたが、いまだその全容は掴めていない。現状でも端子や機器の大半が用途不明。動作原理も定かではなく、制御AIの電子式は未知の構文。明らかに破損しているパーツも確認できた。

つまり、現状の戦術甲冑は、本来必要な部品や設備が欠けた、不完全な状態なのだ。

「たとえばこれ。……なんだかわかる?」

「ふむ?」

「あん?」

首を傾げるところに、目の上に乗せていた濡れタオルをどけ、魔理沙も身を起こす。にとりがポケットを探って取り出したのは直径1センチほどのガラス筒だった。目盛りを刻まれた筒の先端には、樹脂のカバーをかぶせられた細い金属針が見える。

「……注射器 か?」

「ご名答。こいつの操縦席にはさ、こんなのが沢山くっついてたんだ。空っぽだったし、危なっかしいから外しちゃったけどさ」

位置としては腕や首、太腿の静脈であるという。操縦者に何がしかの薬品を投与することを

目的に作られたものだ、にとりては解説した。

「たぶん、興奮剤とか、鎮静剤とか……もしかしたらもつとヤバイ薬を操縦者の血管に直接ぶち込むためのものだと思う。もちろん、操縦中にね」

「うえ……、なんだそりゃ」

魔法の中には、様々な原料から精製した触媒を服用するものもある。魔理沙も集中力を高めるために茸を素材とした魔香や興奮剤を用いた経験があつたが——一般の倫理観を大きく逸脱した魔法使いの常識からしても、強烈な作用を持つ薬品の常用を前提とした兵器など、相当の異常事態である。

「……思うんだけどね、この兵器って、そういう無謀な事をしなきゃ動かせないものなんじゃないかな。それだけ無茶苦茶な理屈で動いてるってことさ」

「なんともぞつとしない話だな」

「まったくだ。これはドン引きの表情!」

三人の視線は、横たわる戦術甲冑へと向けられる。暗灰色の鋼の巨人。外来の兵器だと言うが、一体どんな状況で、何のために用いられていたのか。

巨人の真実は謎に包まれ、実態はまるで霧の中だ。

「しかし、それじゃ動かしようがないってことか？」

「言つたる。あんな一発勝負でとりあえず動かせる魔理沙がよつぽど特殊なんだつてば。私だつて正直、こんなもん乗りたくないよ」

「そりや勿体ないだろ、とりあえず動くもんは動くんだ。どうにかして方法を探してだな……」

「だから、それが出来たら苦労はしないつて言つてるんだよ。大体さあ、こいつの修復と調査は御山の上の方からの要請なの。好き勝手するわけにやいかないんだよ。今だつて早く直せとか状況は掴めたかとか五月蠅いこと言われてるんだ。勝手に動かしたなんて知られたら、またどんな無茶言いつけられるか——」

「だがちよつと待つてほしい。そう決めつけてしまうのは早計ではないだろうか」

勝手に進もうとしていた二人の会話に、こころは強引に割り込んだ。身を乗り出し、火男の面をかぶつて、左右の手で『わたし！わたし！』と自己主張。

「あの舞台の時のことはぶつちやけ良く覚えてないけど、そもそもこれを呼び寄せたのは私であるらしいと聞いた。——ならば私にも乗る権利はあると思う」

「……はあ？　なんでそうなるのさ!?!」

「拾得物の謝礼は五分から二割まで！　物は試しなのでやつてみたい！」

「おいおい、やめとけ。断じて乗り心地のいいもんじゃないぜ」

げっそりとした表情で止める魔理沙に、こころは力強く首を振る。

——これを、このままにしておいてはいけない。

ただ、訳もなく、強い直感があった。

横たわる戦術甲冑、その傍らにちらりと視線を向け、いつになく強固に言い張る面霊気。

「駄目と言われようが私はやるのだ！　ここで引いていたら何のために付いて来たのか分からない。これは屁のつつぱりはいらんですよの表情！」

「……お。なんか知らんがすごい自信だな」

立ち上がって叫ぶところに、無責任に手を叩いてみせる魔理沙。

その隣で、にとりはもう勝手にしろと言わんばかりにデバイスを放り投げた。

宣言するや否や躊躇なくスカートを脱ぎ捨て下着姿で戦術甲冑に飛び込もうとしたところだが、にとりと魔理沙二人がかりで止められた。洪々髪をまとめ、魔理沙同様のツナギに着替えて操縦席の縁に足をかける。

「いいかい、ヤバいと思つたらすぐ止めなよ。これ以上壊されたりしたらたまらないからね！」

「承知している」

にとりの警告は真顔で聞き流し、こころは操縦席の中へ身を滑り込ませた。

「いいか？　その奥のところにペダルがあるから、足を引っかけ押し込んでやる感じだ。で、腕はここを、こうやって……」

「む……」

魔理沙のアドバイスに従って狭い空隙の中にお尻を押し込み、窮屈な甲冑の中に爪先を伸ばせば、確かにその奥に足場を感じる。金属製のペダルに爪先で触れて押し返すと、足場は徐々に奥へと下がっていき、やがてちよいどいい位置で停止した。

同様にハンドレバーの位置も調整し。左右の腕を脇のベルトに潜らせ、ハンドルを握ってトグルボタンを順に押し込む。

「よし、いいぜ」

「おお」

合図とともに魔理沙が背中の中のハッチを閉めた。ぐんと背中がせり上がる感触に、思わず面霊気の頭上に大飛出面が浮かびかける。

甲冑の背中であしゅうと音が聞こえると同時、ぐっと周囲の密閉度が増した。こころは自分が甲冑の内部に「閉じ込められた」のを理解する。呼吸の必要はない面霊気のはずの自分が、不思議と息が苦しくなったような錯覚を覚え、こころは小さく首を捻った。窮屈な操縦席の中であるためか、心なしか頭上の面も元気がない。

(……ううむ)

光の途絶えた甲冑の操縦席に取り残され、一人、こころは静かに息を吐く。自分も理由の分

からない高揚感に衝き動かされて操縦を申し出たが、一体なぜこんな事をしようとしているのか。そもそもなぜ自分なら動かせると思ったのか。いくつもの疑念が脳裏を掠める。

「……前が見えねえ」

煩悶しながら、じつと閉じていた目を開き、暗闇の中に面霊気がぼやいたと同時に。

甲冑の内部が、鈍い音と共に明かりを灯した。小さな唸り声と共に機関が火を灯し、周囲にぼつぼつと光がともる。

機体がどくりと脈動し、わずかな振動が座席に響く。

こちらの目の前に大きなモニタが跳ね上がった。複雑な数値にグラフを示す窓が次々と開いては閉じてゆく。滝のように流れ落ちる白黒の文章は、兵器の機動に関わるものなのだろうが、こころにはさっぱり内容が分からない。

だが。

「……………」

息を吹き返した戦術甲冑の脈動が聞こえる。鋼の内側に連綿と受け継がれた想いが伝わる。

レティクルの向こうに伸ばされる手。無慈悲な意志に踊らされ、まき散らされんとする恐怖を、惨劇を回避し、懸命に足掻かんとする意志を。こころは一瞬の中に垣間見る。

いかなる理由か、分からない。しかしこの狭い兵器の操縦席は、不思議とこころの意識に馴

染んでいた。まるでもともとこの身体に備わっていたように、こころにはこの戦術甲冑の動かし方がわかる。

『どうだ、こころ？』

「問題ない」

くぐもつて聞こえる魔理沙の声。それに力強く答えて、こころはペダルを踏み込んだ。



「お……？」

最初、立ち上がる戦術甲冑の動きは魔理沙の時に比べてぎこちないものだった。よろよろとバランスを崩しながら、危なっかしく一步を踏み出す。が、大地を踏みしめ続く二歩目は意外にもしっかりとしたもので、三步、四歩と続くうちに、その動作はみるみる自信と力に満ちたものに変わっていく。

歩行から急ぎ足、そして疾走へ。3tもの自重をまるで感じさせない、風のような足運び。

「え……マジ？ ……ちゃんと動いてる……!!」

だん。足踏みの一音でぐんとスピードを増した機体は、大股の速度で地面を駆け抜け、つい

には風にも近い速度でテストコースを走りだす。飽きて帰り始めていた野次馬の河童たち次々に水の中から顔を出した。

踏み出す脚は秒間に4歩、歩幅は5m近い大股だ。時速はゆうに70km、魔理沙の箒の巡航速度を超えつつある。上半身のわずかな前傾姿勢、滑るような左右の足運び。先刻の倍以上の速度を出しながら、戦術甲冑の機動は驚くほどに滑らかだ。

「うおお……やるな、あいつ」

思わず感嘆の声を漏らす魔理沙の隣で、にとりは何気なくモバイルに視線をやって——画面を流れる文字列に瞠目した。

「げ……なに、これ!!」

モバイルには、戦術甲冑の各所の機能、動作を読み取る端子から吸い上げた情報が表示されている。計測できるのは至極単純な断片的データのみ。解読不明の生データも多数含まれている。いまだ未知の兵器の解析に際し、わずかでも助けになればと設置したものだ。

だが、それでも、異常事態が起きているのは明白だった。

戦術甲冑の出力と、機動。その二つを結びつける動作係数が、異常なハイペースで上昇を続けているのだ。

その数値は魔理沙の搭乗時のおよそ3倍。

昨日、丸一日をかけて大工房のメインフレームが計算した、稼働性能の理論最大値を2倍近く上回っていた。

しかも、現在もなおそれは更新中である。

にとりは何度も目を擦り、みるみる小さくなっていく戦術甲冑の背中と、デバイスの画面を見比べる。

(係数43、44、46……。まだ上がるの!? ……あの面霊気が、機器の設計以上の機能を引き出してる……!? そんな馬鹿な!)

あれは兵器だ。純然たる機械だ。特定の用途のために設計され、想定通りの機能を発揮することが求められる存在だ。操作技術によって作業の効率自体を上げる事はできるだろう。だが、いくら操縦者が気合を入れたところで、500kwのエンジンが設計限界以上の力を出すことはあり得ない。

計量限界5kgの秤が、10kgの重さを測ることができないように。飛行機は、水の中を泳いだりしないように。

機械は、本来想定されていないスペックを發揮することなど、ありえない。

「何が起きてるの……!?」

驚愕に眼を見開くにとりの前で、こころが駆る戦術甲冑はテストコースの端を飛び出した。

整地されていた地面から、溪流近くの段差の大きな岩場へ。不安定な地面を巧みに捉え、飛び越え、戦術甲冑は疾走する。

魔理沙は、何もない平地ですら転んだというのに！

「おお!? おい!? こころ!?」

魔理沙が思わず声を上げた。さらに速度を上げた戦術甲冑は、そのまま岩場を踏破して溪流の向こうへと突っ込んでいった。深度1mは超える水地を軽々と踏み越え、小屋ほどもある岩を巧みに飛び渡る。

呆気にとられる観客達が、ぼかんと見つめる中。一面靈気の駆る鋼の巨人はそのまま、大工房の周囲を、事も無げに一周し。

スタート地点に戻った戦術甲冑は、ほとんど地響きもなく着地、静止した。

しゅうと蒸気を吹く四肢を折り畳み、待機状態の座り込み姿勢を取らせた甲冑の背中、ぱかりと開いたハッチから顔を出したところは、無言でガッツポーズをとってみせた。

「……おおおおお!!」

広場を囲む溪流に、感動と歓声が波紋のように広がってゆく。一面靈気の鮮やかな操縦に、まるで生き物のように舞った鋼の巨人に、その場に居合わせた者たちが一斉に拍手を送る。

「凄いな! どうやったんだ今の!?」

「よく分からないけど、できた。……これが自慢の表情！」

扇を広げて歓びの舞いを披露するところの前。

時ならぬ喧騒に包まれる大工房には、青空の下の戦術甲冑と面靈氣を言祝ぐように、白い紙吹雪が舞い散っていた。

三.

霧深く 雲間の峰に

天狗あまぎつね

軍議は踊る

火薬庫

の庭

▼

幻想郷の北東。玄武の沢を南に、博麗神社を見下ろすように位置して聳える山がある。雲間を貫いて煙を吐くその峰こそが、かつて日ノ本一の霊峰の座を競って争ったあさまの山であることは、住人たちならば誰もが知っている。

幻想となった日ノ本一の山を頂に、いくつもの霊峰が連なり煙を吐くこの地には、妖怪の山と呼ばれる支配体制が築かれていた。天魔をその頂点に、十二峰の大天狗が支配する天狗達の管理社会である。かつて鬼の支配によって始まったその支配体制は、千年の時を経てなお変わらず強固な閉鎖性と結束を保ち続けていた。

高度に自動化された工業力と文化をもちながら、烏天狗と山伏天狗による出版記録体制によって徹底して外部の情報を遮断し、南北二つの白狼鎮台による軍備、哨戒監視網を巡らせる妖怪の山は、幻想郷に隣接しながらその実、地底や天界と並ぶ一つの異郷と呼ぶことができた。そんな妖怪の山の中樞、鎬ヶ峰の十大天禁衛府。

映画館やカフェすまわだしのが並び、ひととき賑わう茗通りを、睥睨するかのごとく聳える楼閣の狭間。各階を繋ぐ透渡殿すきわたしので、対峙する二人の天狗の姿がある。

かたや、見上げんばかりの巨軀を分厚い修験装束で包んだ、紺肌威容の大天狗。手足はその指先に至るまで風雨に削りだされた巨岩のごとく力強く、口髭眉毛ともに濃い鷲鼻は巖のよう。見開かれた黒い瞳は、雷光のごとく周囲を威圧する。

かたや、カメラと手帳片手の黒髪の少女。正装の天狗装束ではなく、略式頭襟に首布と一本歯履物だけを揃えた装いは、禁衛府の厳肅な気配の中ではいかにも浮いていた。

少女の風のごとく飄々とした気配は、外見にすぐわぬ経験と年齢を感じさせる。眼前の大天狗の視線にも動じることなく、不敵に微笑みを崩さない。

「ここで何をしておるか、射命丸よ」

「これはこれは前鬼坊様。このような所でお会いできるとは思いませんでした」

不機嫌を隠そうともしない大天狗——那智瀧本、大峰山前鬼坊に、射命丸文はへらりと笑みを覗かせて、神妙にお辞儀をしてみせた。背後に控える白狼の禁衛兵にも合わせて視線を送る。

「丁度良いところでした。ついさつき、僧正坊様にお会いしてきたところなのです。いやあ、今回あちこちに取材を申し込んだんですが、どこも忙しいから相手にしてる暇はないと、けんもほろろに断られましてねえ。前鬼坊様にもぜひお話をと思い、いまからお伺いするところだったんですよ」

「……例のくだらん記者ごっこか。誠に軽率妄動。愚かなものだ」

「あやや。これは手厳しい。ですがこれも御山における烏天狗の務めです。天狗たるもの、風聞をもつて世を騒がし乱すが行いの規範でありますから。特ダネの気配あれば、いかなる場所にも一番乗りが幻想郷最速たる私の信条でして」

「実によく回る口だな」

文の並べたてた世辞をぴしゃりと遮つて、前鬼坊はじろりと彼女のカメラと手帳を睨みつける。拳ほどもある目玉を剥いて睨む彼の視線は、そこらの木っ端小天狗であればそれだけで卒倒しそうなほどの威圧感だ。

「いえいえ、それほどでも。日々精進の毎日ですよ」

（——これはまた、どうにも面倒な人に見つかりましたねえ）

適当に世辞を述べて誤魔化そうとしたが、容易に赦免の気配は見られないことに、文は内心で舌打ちする。

前鬼坊は妖怪の山に数えられる十二峰の大天狗にあつても、きつての武闘派で知られる。

彼は天狗として吉野熊野の霊峰に祀られる以前は、かの大行者役小角の守護を務めた式剛鬼でもあつた。言わば、天狗たちが苦手とする鬼に近い存在なのだ。ゆえにその威圧感は、他の天狗たちとは一線を画していた。

「……いい加減に身を改めたら如何だ。鞍馬山四郎坊たるお前が、風聞に一喜一憂して騒ぐ大

会に現を抜かしている場合ではないだろう。その行い、誠に付和雷同。看過できぬ」

「あやや。それはまた、異な事を仰いますね。その鞍馬の僧正坊様が新聞大会優勝の常連ではありませんか」

天狗社会において、鞍馬階報の名は誰もが知るところであろう。大天狗筆頭にして鞍馬山魔王尊——天魔の代弁者たる鞍馬山僧正坊が発行する天狗新聞である。

本職の激務ゆえに発行頻度こそ他紙に劣るが、その独自の視点と齒に衣着せぬ舌峰で天狗社を鋭く抉る論調は、上から下まで幅広く天狗たちの人気であった。

「いやあ、今回の一件、まったくもって興味深い限りですよ。御山に十二天狗連名の勅命が発せられるなど、三百と八十年ぶり。かの島原の大乱以来ではないですか。それほどにかの石舞台の一件は御山の一大事であるということですよ。だというのに、かの僧正坊様をはじめ、名だたる名紙主筆が軒並み報道を自粛、足並みを揃えて取材を控えている。……これは一体いかな理由によるものか。特ダネの気配がふんぶんしますねえ」

笑みを作り、文は手帳を繰って取材メモにペン先を滑らせ、

「かの石舞台的一幕にいかなる意味が秘められていたか。舞手、秦こころ嬢の能舞台を所望したのは一体誰なのか。例の『落とし物』の正体はいかに。はたまた、ガサラの鬼とは一体——」

「射命丸！」

前鬼坊が吼えた。びりびりと楼閣を軋ませる一喝に、遠くから様子を見守っていた天狗たちが縮みあがる。幾重にも重なる禁衛府の屋根を震わせた大喝に、しかし文は涼しい顔で、片目を閉じて応じるのみ。

「というわけで、私は文々。新聞主筆として、この一件について体当たり取材を試みているわけなのですが、誰も真面目に取り合おうとしてくれないのです。噂では、姫海棠のご令嬢まで行方をくらましていると聞きますし。ここでお会いできたのはまことに僥倖、千載一遇の機会です。ぜひ、十二峰の警護を司る前鬼坊様のご見解をと思つるところなのですよ」

「成程な。禁衛府を嗅ぎ回るだけではなく、僧正坊にまで直訴の腹積もりか。白々しい。貴様も古参の一人であろう。弁えよ、射命丸。貴様の行いは誠に軽慮浅謀。軽率に過ぎるぞ」

「直訴？ はて、なんのことやら？」

白々しく首を傾げる射命丸に、前鬼坊はますます不機嫌を顕わにし、露骨に顔を顰めた。

「何れにせよ、お前達の遊戯が許されるのは、御山の秩序あつての事。徒に御山を乱すようなことがあつてはならぬと心得よ。……たとえ、貴様に天魔様の御寵愛があつてもだ」

「天魔様の？ いえいえ。私はそんなものを受けた覚えは一度もありませんが——ご不快にさせてしまったのであれば謝罪いたします。無論、御山の一天狗として前鬼坊様のお言葉に逆らうつもりなどありませんとも。この通りです」

そう言い、射命丸はカメラを弄って取り出したフィルムの中身を前鬼坊の前ですべて引き出した。感光して真っ黒になったフィルムをポイと崖上から投げ捨て、ついでに手帖もビリビリと千切って風に飛ばす。

「前鬼坊様が危惧されるような意図はありませんが、疑われるような行為に及んでしまったのは事実。身の潔白といたします。仮にもし私が何かを企んでいたとしても、これでご破算。記事にはできません。ご安心ください。清く正しく、それが私の信条ですので」

「……小賢しい真似を。儂の機嫌でも取ったつもりか」

「いえいえ。そんなつもりはありませんとも。この射命丸文、二心なく御山のために尽くしていることを示したまでです。それとも、ご不満であればただちに詮議におかけになりますか？」

「実に、鬱陶しく囁るくちばし嘴くちばしだな」

「まだまだ若気の抜けぬひよつ子なものでして。精進いたします」

「……その言葉、忘れるな」

ついに根負けしたか。前鬼坊は踵を返してその場を立ち去ってゆく。背後に従う白狼天狗たちもそれに従った。彼らが会話の最中、一言も発さずにこちらの一挙手一投足に注視を払っていたことに、文は気付いていた。

禁衛兵。御山の中枢内で唯一帯剣を許された、天魔直属の近衛守護。一命あれば、彼らは即

座に御山の刃となり、文とて躊躇いなく斬り殺すであろう。鍛え抜かれた群狼の牙、最速のこの翼とて無傷で逃れられるか否か。

空っぽになったカメラの中を一瞥し、文は深々と吐息。

（いやはや、実によく見える眼をお持ちですねえ。禁衛府の兵士は豊前坊様と三尺坊様の管轄だったはずですが）

前鬼坊が率いる禁衛兵らの中に、白布で顔を追っていた者たちがいたことに、文は目敏く気付いていた。

天眼機関——呪印を編んだ布で目を覆い、耳を遮り、口鼻を隠した彼らは、御山の最高機密にして、万里を見通す「眼」たる神籬である。

生来より鋭い五感を持つ白狼天狗の中には、まれに遙か遠隔地を目の前のように見通す神通力、千里眼を持つ個体が生まれる事が知られている。彼らはその中でもさらに優れた者たちを選び、厳しい修法を科して見出された「浄天眼じょうてんがん」の持ち主であった。

彼らは御山の最奥に居ながらにして、過去未来万里を自在に見通す、天魔の側近である。閉鎖社会である妖怪の山が、幻想郷の各勢力に対して常に優位を保ってきた理由のひとつは、彼らの力によるものであった。

いわば、御山秘蔵のとびきりの希少種。彼らは御山最奥の尊天宮そんでんきゅうを出る事はなく、生涯を

そこで天魔に仕えて過ぐす。それを、いかな十二天狗とは言え、禁衛府の外に連れ出すなど、尋常の事ではない。

「これはだいぶんきな臭くなってきました。例の戦術甲冑とやらは、そこまで御山にとつて重要なもの、と。……なんにせよ、取材続行というところでしようかねえ」

袖に忍び込ませていたフィルム——無論、先程捨ててみせたのはダミーだ——を取り出し、文は不敵に微笑む。懐の天狗団扇を取りだしてすいと空を差し招けば、ひゆるんと渦を巻いた風が、四方に飛び散っていた手帖の紙片を残らず運んでくる。

「はたてもとんだことに首を突っ込んだようですねえ。……無事だといいますが」  
手帖を元通り揃えて懐に仕舞い、独り語ちた文は静かに翼を広げて飛び立った。



ごうんごうんと頭上で巨大なファンが回り、黒いパイプをごぼりと流れる水流が壁を這う。沢の支流から引いた冷水による空調は大工房3階のサーバルームの温度を保つためフル回転していた。晩秋に差し掛かる季節だというのに、部屋の中は蒸し暑いほどで、ツナギを半脱ぎにしたとりは首元の汗をぬぐってキーボードを叩く。

外界から流れ込んだ機材で組み上げられた電算機がそこかしこで稼働する中、中央に陣取る巨大な黄色の筐体は龍下たつしたの支族が組み上げた水冷式メインフレームである。河童の集落においても規格外のサイズと性能を誇るこのサーバ群を用いて、にとりは一人黙々と戦術甲冑の解析を進めていた。

賃貸料は<sup>2時間</sup>一刻当たり、最高級の羽後胡瓜が五籠。ぶっちゃけ暴利だがこれ以外に戦術甲冑の制御電脳を解析できる手段がないため、足元を見られていることには目をつむらざるを得ない。

「ふーむ」

冷やし胡瓜を齧りながら、にとりはしかめ面でもニタを睨んで吐息。

画面に並ぶのは、戦術甲冑の機動マニュアルや製品カタログ、宣伝用PV、運用時ブリーフイングに用いられたと思われる動画資料などだ。いずれも制御電脳のストレージに残っていたものである。チームに加わった魔理沙がこれらを見つけ出したことで、戦術甲冑の調査と解析は劇的に進行した。

「時々、魔理沙の鼻の良さは恐ろしくなるよな……」

お宝を嗅ぎ分ける嗅覚に関しては、彼女に並ぶものはそう居ないのかもしれない。彼女の被害に遭っている一同の顔を思い出し、にとりは軽く苦笑。

整備に関する消耗品など、各種のデータなどを比較するに、そもそも戦術甲冑というのは非

常に実験的な側面の強い兵器と言えた。開発元である【豪和インストルメンツ】の製品として扱われているのは、大工房で接収された壱七式《雷電》のほか、大容量バッテリーを搭載し連続稼働時間を大幅に引き延ばした壱七式改《震電》のみ。それも各部装甲の改良と装備を変更した程度の、実質はマイナーチェンジ版と言つていいものだ。

この戦術甲冑という兵器は、車や飛行機のような、多様性に溢れる外来の製品とは大きく性格を異にしている。その事実を、にとりは認めざるを得なかった。

「……人間の世界の機械には、これでも結構詳しいつもりなんだけどな」  
ぼやき混じりに傍らのクーラーサーバーから新しい胡瓜を引き抜いて口へ。

キーボードを叩き、《雷電》の制御電脳と同期させた仮想マシンを呼び出す。龍下ご自慢のバイナリウィンドウを経て、たちまち溢れ出す外界のプログラム言語の奔流。ゴーグル越しに光る文字列をじつと眺めながら、にとりは一心不乱にキーを叩く。メインフレームの冷却水が流速を増し、天井のファンが一層うるさく音を立てた。

電算機のプログラム——電子式という概念は、昨今の若い世代の河童たちがこそぞつて夢中になつてゐるものだ。実際の発明ではなく、電算機の中で式の文字列を組み上げて、機械の制御を改良するのは、河童のギーク気質に実によく合致していた。そのせいか、最近は自分の淵や池に引きこもつて、外に出ることを極端に嫌う傾向にある河童も多いと聞く。

「つと、これか」

河童たちがめいめい勝手に作る独自言語に比べれば、人間たちの書くプログラムは、統一の規格で書かれて非常に理解しやすい。戦術甲冑の心臓部ともいうべきAIの構文を読み解くことで、にとりは概ねこの巨人の本質を掴みつつあった。

大層な外観をしているが、率直に言ってしまうとこの巨大な人型の大半はそうややこしい造りをしている訳ではない。搭乗した操縦者の操作インプットに対して、忠実に動作アウトプットを返す、そのシステムの集合体だ。

ただ一点。その機構に求められている精度・確度は、にとりの知るいかなる発明機械に比べても、けた外れに高度なものであった。

そもそも河童の発明というのは、10回に7回か8回きちんと動けば立派な完成品であり、50回動かして1回壊れるかどうかとなれば、大変優れた信頼性を誇る逸品である。また照準や精度もアバウトなものが大半だ。元来が妖怪として決して非力ではない彼等にとって、発明というのは動かなくてもそれだけのものであったという割り切りが普通であった。

しかるに、この戦術甲冑《雷電》に求められる精度はそれらとは比べものにならない。中でも、姿勢制御、歩行動作、腕部アクチュエーターの繊細な稼働操作に求められている操作精度は人間よりも高レベル。しかも千回、あるいは一万回、百万回同じ動作を繰り返しても、確実に

に寸分の狂いなくそれを実行する、きわめて精密で繊細なレベルを求められている、

それは、過酷な環境下で運用させる兵器には、あまりにもそぐわないように感じられる。

「ここまでくるとちよつと気持ち悪くなるなあ。斬った張ったで使う兵器に、ここまでのものを作らなきゃいかんものなのかね……?」

人間の職人が作る道具には、いわゆる名人芸、技巧の極みとして、機能や性能としては些細と言える部分にまで、徹底して拘ったものがある。戦場で打ち合えばすぐ壊れてしまう弓矢や刀、鎧にもそれらは求められていることから、人間の職工の習性として考えれば、納得できない事もない——が。

にとりはこちらりと画面上のカタログに目をやる。指の位置、手足の動作、数百分の1ミリまで齟齬なく再現する究極の動作性を喧伝する開発の内部資料。

(こんな、実際に生かせるかもどうかに怪しいものに、一体どれだけ金かけてんのさ?)

この、マッスルバックゲージ戦術甲冑に要求された動作性能を可能としているのが、甲冑の重要性の大半を占めている人工筋肉。微弱な電流に反応して伸縮し、硬度や粘度も変質させる複合結晶、高分子集合体である。この人工筋肉は高分子モーターとして規格外の出力を持ち、その出力荷重は最大で80トンにも及ぶ。機械的な印象の強い戦術甲冑に、あの生物めいた動きを可能にさせているものの正体がこれだった。

人工筋肉の製品としてのコードネームは《マイル1》。

「道標の1……か」

兵器開発の転換点という意味だろうか。確かに戦術甲冑を動かす上では必要不可欠、軽量化と二脚保持の出力を両立する画期的な発明であるが、一方でこれを二脚歩行戦車開発の重要点と位置付ける名称に、にとりは妙な違和感を覚えていた。

「確かに、二足で歩く兵器を作るのにこいつは不可欠だ。だから、それを開発できたことは重要な一歩だろう。……でも、だとするならどうしてこいつは……」

「こんなに遅くまで、ずいぶん熱心ね」  
「ひゅひゅひゅ!!」

ふいに割り込んできた声に、にとりは思わず仰け反る。視界を埋めるのは、丸こい手足をした身長30センチほどの人形だった。

思わず掴んで投げ捨てようとしたものの正体を悟り、にとりは辛うじて椅子から転げ落ちるのを堪え、ずるずると床に滑り落ちる。つんのめった姿勢からどうにか身を起こし青息吐息。

「……な、なんだ、アリスか……驚かせないでよ」  
「そんなつもりはなかったんだけど」

二体の人形を引き連れるのは、金髪の少女。七色の人形遣い、アリス・マーガトロイドだ。

森の人形遣いは、いつものごとく魔理沙によってこの一件に巻き込まれた。戦術甲冑の動作において幻想郷で一番詳しいのは、多数の人形を操作し、時に巨人に匹敵する巨大人形をも稼働させる彼女であろうという、実にアバウトな理由によるものである。

「神経系の解析、終わったわ。これが報告書」

アリスの人形たちが分厚いファイルを運んでくるのを見て、水棲のエンジニアはああと頷き、椅子の上に戻りながらうんと背筋を伸ばす。

「外挿した神経系にいつもの電磁波形が観測されたわ。サンプルから複製した人工筋肉でも同様。精査はこれからだけど、ノイズとは明らかに違うものね」

「うーん。やっぱりか……」

工房でアリスは主に、戦術甲冑の神経系、電子制御のセンサー類を担当していた。《雷電》の電装系は、幻想入り召喚時の影響で大きく損傷を受けており、そのままでは修復が不可能と思われたことから、アリス謹製のヒヒイロカネワイヤーに大規模な置換が行われている。

「興味深いのは、パイロットが搭乗後から採取したサンプルだと、それ以前のモノに比べて出力信号に明らかな差が見られたことね。人工筋肉の分子構造の再生が進んでいることは、他のレポートで読んだけど」

「内部の電磁波形まで変わってるのか……単純な強度の変化じゃないんだよね？」

「ええ。……推測でしかないけど、私達が機能向上と呼んでいる現象は、もしかしたら機能の修復、あるいは再生でしかないのかも知れないわ」

「……戦術甲冑が、本来の姿を取り戻そうとしてるってこと？ そんな……」

「馬鹿げた想像、とは切り捨てられないんじゃないかしら」

モニタの前で爪を噛み、にとりは額に皺を寄せる。

「……ま、いいや。ファイルはそこに置いといて。後でまとめて読んでおくよ」

「お疲れ様。……飲む？ 貴方、確か珈琲派よね？」

アリスが人形を操って、カップとポットを運ばせてくる。にとりは礼を言っただけを受け取り、口を付けた。悪魔のように黒く、地獄のように熱い液体が舌を焼く感触に、熱の籠っていた頭から力みが抜けていく。

「ここは毎晩この調子なのね」

サーバ室の窓の下、一階の格納庫では、河童たちに交じってこころと魔理沙が揃って大騒ぎ。今朝まで飲まず食わずで三日三晩走り回ったツケか、毛布を跳ねのけ、さして寝心地の良いとも思えないコンテナの上で熟睡している。

「まあね。いい気なもんだよ。私たちの苦勞も知らないで」

「……でも、放っておけない？」

「……言わせないでよ、恥ずかしい」

アリスもまた、この大工房に寝泊まりしていた。種族魔法使いであるため飲食も睡眠も不要という彼女は、この工房の中でいつもどこかで作業に動んでいる。

本人の意向など無視して引つ張ってこられたとぼつちりだというのに、なんだかんだで協力してくれているのは、彼女の人付き合いの良さゆえだろうか。孤高を気取っているが、基本的には寂しがり屋である——というのは、白黒魔法使いの評。

「それで、何に悩んでいたのかしら？」

「……うん。これなんだけども」

にとりはキーを操作して、《雷電》の販売用製品カタログと、いくつかの動画をディスプレイに表示させる。

「些細なことなんだけどね、どう考えても妙なんだ。外の世界の機械で、人間たちが作るこういうカタログってのはさ、型の古い製品とか、併用できる他の用途の製品の宣伝も一緒に載ってるもんなんだよ。特にこんな二足歩行兵器なんて、状況に応じてたくさんバリエーションがあるはずなんだ。でもさ、これには旧型の情報とか、型番違いの情報が集ったく見つからない。これ、どういう事か分かる？」

「この兵器が、単独であらゆる状況に想定されたマルチロール機である……ということ？」

「んにや、半分正しいけど、半分違う」

飲み干したコーヒーカップをかちやんとテーブルに戻し、にとりは画面の一点を指さす。

「この機体が、過去類を見ないコンセプトで開発された、まったく新しい兵器だつてのは間違いないと思う。そんな風に宣伝してる動画もあつたしね。これから発展してく兵器の初期モデルなのかもしれない。でもさ、じゃあ人間達は どうしてそんなものを、一から作らなきゃいけないかつたんだろう。それがどうも納得いかない」

「……………」

外の世界の兵器として、戦車、軍艦、あるいは戦闘機といったものが存在していることは、にとりも外界の文献を通じて知っている。

それらには全て、戦場で目的とされる役割があつた。

カタログによれば、この戦術甲冑《雷電》は、障害物や高低差のある都市部における対戦車戦を想定して作られた兵器だとされている。人工筋肉による生物的二足歩行が実現する走破性や、肩部ワイヤーウインチ、脚部にある気化爆弾アルムブラストによる立体機動。戦車、装甲車に立ち向かうための十分な戦力を保持する重量とサイズ。

だが、この機体がどのような戦場で有効に運用され、また戦場の新たなる可能性を開くかについての宣伝が書き並べられたデータ群に、にとりはどうしても素直に頷くことができない。

「ねえアリス。率直に言つて、こいつの兵器としてのスペックはどんなものだと思う？」

「——搭載火器が充実していれば、火力はそれなり。敏捷性、走破性もかなりのもの。巨大であることの威圧感や、人型であるゆえの汎用性もあるわね。……でも、使われている技術からすれば、どうしようもなく非効率」

「やっぱ、アリスもそう思うか」

人形遣いの忌憚のない意見に、にとりは腕組みをして大きく息をついた。

「私は河童だからさ、むしろ、そんなに違和感なかったんだ。人間は時々、とんでもない技術を思いもしないことに使うからね。こいつをバラしてる時も、凄くわくわくした。でもさ、真面目に考えてみると、外の世界の人間がこんな非効率なものを作ってるのはすごく不自然なんだ。そりゃ、こいつの技術はすごいけど、最強無敵のスーパーロボットかっていうと違うだろう？ そりゃ丸腰の人間よりは強いだろうけど、魔理沙が本気になつて相手すれば、魔砲一発でけりがついちやうんじゃないかな」

全高4.5m、乾燥重量2.5トン、全備重量5トン弱。暗灰色の装甲を纏い、武装して移動する外見の威圧感<sup>プレッシャー</sup>は確かに強烈だが、戦術甲冑<sup>タクティカルアーマー</sup>が見た目通りの強さを持っているのかというと難しいところだ。人工筋肉による大幅な性能の底上げがあるとはいえ、二足歩行では自重を支える関節部へ負担からは逃れられない。荷重の都合で乗せられる装甲にも限界がある。強度

は弾幕に耐えられるほどではなく、一方で機動性の面ではその巨体が足を引っ張る。いくら最高速度が速かろうと、的が大きければそれだけ当てやすい。

構造が複雑なため、どこかに攻撃が当たれば動きを止めるのには十分。外界の兵器が弾幕よりも弱いということはない筈だった。しかも、肝心の大きさも中途半端で、確かに巨体であるとはいえ、少し力に覚えのある妖怪ならこの程度、苦もなくなぎ倒してしまうだろう。

「それに、外の世界に、こんなものに乗らなきや戦えない相手ってのがいるのかね？ 外の世界の戦争には詳しくは無いけど——人が乗り込んで戦うのは戦車や戦闘機、あとは軍艦なんだろう？ そのどれと戦っても、こいつが勝てるとは思えないな。よっぽど入り組んで、遮蔽があるような場所、特殊な状況限定ならわかるけどさ」

つまり、人間は焚き火の中に足を突っ込めば大やけどだろうが、戦術甲冑なら苦もなく火を踏み潰せる。しかし、大規模な火事に巻き込まれた時の危険性は大差ない。小川程度なら踏み越えられるだろうが、氾濫した川に流されずにいられるかという別問題だ。

4 m強という体格は、外の世界の兵器運用理論・技術理論に基づいた最適サイズなのだろうが、その大きさが十分な利点となるかというかなり疑問符が付く。

「とにかく、すごくアンバランスなんだよ。外の科学が優れてるとしたって、こんなものを一朝一夕に造ろうなんてのは無理だ。すごく長い時間と、とんでもない予算をかけて研究開発を

して作られたとしか思えない。けど、どうしてこいつはこのサイズ、この重さ、この格好じゃなきゃならなかったんだ？」

より良い兵器としての形を見出すならば、人型ではない方がはるかに良い改善方法がいくつもあった。四脚の安定性は言うに及ばず、わざわざ外部との接触で損傷しやすい頭部を設ける理由は？ 前腕部には精密作業用マニピュレータが別途設けてあるのに、腕部に五本の指を持たせる理由は？

搭載している、あるいはカタログによつて搭載可能とされている兵器を見てもそうだ。戦術甲冑は、人型であることで多くの制限を得てしまう。腕部に小口径の機銃を装着するのなら、初めから腕を銃座に置き換えてしまえばいい。搭載できる地对地・地对空ミサイルにしても、腕部下のラックに配置しなければいけないため、操作性や火力に大きな不安を抱えていた。

カタログによればこれらの武装は新技術により戦車の上面装甲からの攻撃で十分な火力をもたらずと言うが、これだけの兵器を作る技術があるなら、真つ当に戦車を駆逐するもつと効率のいい兵器がいくらでも作れる。

そして。機体の制御動作プログラムや各所の装備を確認する限り、戦術甲冑には試行を繰り返しては欠点を改良し、より良い形での完成を模索し続けた痕跡がそこら中に見受けられる。それがゆえに、にとりにはこの戦術甲冑の兵器としての中途半端さ、不自然さが違和感として

より強く浮かびあがって見えた。

「これじゃ、まるで——最初から、どうしてもこいつが人型でなきゃいけなかったみたいじゃないか。それこそ、兵器としての完成度なんか、どうでもよくて」

最終的に行きつく進化の完成型が決められていて、技術的、能力的な制約の中でどうにかまともなものになるように試行錯誤しているような——どうにも奇妙な痕跡ばかりが目立つ。

それは、アリスが先ほど示唆した、戦術甲冑の機能が再生しているという推論に結び付く話でもあった。

執拗な安全性、過酷な環境にも対応するための防護。これは外見から伝える通り、戦闘に対して作られたものであることを示している。しかし、ここまで非常に手間と暇を掛けて、兵器を作る理由が果たしてあるのだろうか？

「……人型。そうね、人形ね」

「アリス？」

思案の後、アリスはにとりの言葉を反復して首肯する。傍らの人形をひよいとテーブルの上に立たせて、そつと胸の上に一冊の魔道書を抱いた。

「魔理沙から聞いたことがあるかしら。私が人形を作る理由」

「……まあ、ざつとは」

種族魔法使いは、その身をすべて捧げて、己の究極たる魔法を目指す生き物だ。新たな因果の地平、誰にも辿りつけない根源。生き物としての魔法使いは、その名の通り、生きることの全てを魔法へと捧げ、己自身を魔法にするために存在する。

そして——七色の人形遣い、アリス・マーガトロイドが生涯をかけて挑む魔法とは、完全自律人形の創造であった。

「魔法使いが求める魔法というのは、その根源——自己と分かち難い不可分の因果によるものなの。どうしても偽ることのできない、根本の自我ということね。そこには理由や理屈はないわ。それが自分の目指す魔法だから。最も自然な自分だけの魔法だから。周りから見てもどれだけ滑稽でも、非効率でも、その根源を見誤れば、魔法には至ることはできない」

「それが、アリスにとっては人形、ってこと？」

「ええ。それが私の求める究極、魔法の行き付く先だから」

にとりに答えながら、アリスは誰かに呼びかけているようでもあった。上海、蓬萊の名を持つ二体の人形が、アリスの隣にそつと並ぶ。サーバ室の窓に近付き、アリスはそつと1階の格納庫に目をやった。毛布にくるまる魔理沙達を見下ろして、吐息。

「確かにあなたの話を聞いていると、この戦術甲冑はそれと同じように、効率や内容を度外視して、別の完成形、別の目的を持っているようにも見えるわ。兵器としてではなく、まったく

の別の用途、他の意味を。……いいえ、もしかしたら、兵器開発自体が対外的な題目なんじゃないかしら」

ひゅん。アリスの繰る糸にしたがって、無数の人形が宙を奔る。アリスは弾幕においても魔法においても人形を操るが、それは彼女にとつて人形が最も得意とする魔法技術であるからというわけではない。

己の根源がそこにあると見出したからこそ、アリスは食を捨て虫を捨て、魔法使いとなつて不得手なところから一歩ずつ、人形を作り始めたのだ。

「作りたかったのは、戦場に新たな展開をもたらす兵器ではなくて、もつと別の何か。それが、この大きさ、この機能を持つ、中に人が乗り込むための存在であったというだけで、兵器としていかに優れているかなんて、開発者の本望とは関係なかったんじゃない？」

「……それは、じゃあ」

それでは。一体。

この、戦術甲冑——二足歩行兵器とされているはずのものは、一体何を根源として生み出されたものかというのだろう。戦争とは科学を何よりも発展させるものだ。そんな場に心血を注ぎ、隠れ蓑としてまで、一体誰が、何の目的で、こんなにも途方もない情熱やコストを戦術甲冑に注ぎ込んできたというのだろう。

4. 5 mの機体の中に、怨嗟のごとく積み上げられた膨大な技術。それに関与してきた数え切れぬほどの人の手。情念。それらに触れたような気がして、にとりは小さく身震いする。

メインフレームの熱気の中、いまだ汗が滲むほどに気温は高い。

けれど、底冷えするかのように昏い情動が、焦がれてやまぬ待望への執念が、この鋼の装甲の下に詰まっている。

それはあまりにも、恐ろしい想像だった。



サーバ室から、一步廊下に出れば間もなく訪れる冬の気配を強く窺わせる風が吹き付け、たちまちにとりの汗を払った。しばらくはその涼しさに身を任せていたにとりだが、すぐに寒くなり、作業用のツナギを羽織り直す。

アリスと別れ、さらに作業に没頭して4時間。既に空の端はうつすらと白い。

仮眠室では雑魚寝で夢の中にいる河童たちがひしめき、結局休むこともできないまま、にとりは休憩室のソファでぼんやりと思考を巡らせていた。

乱雑に積まれた食器やお菓子の食べかすは、汚れたまま乾いて、栄養胡瓜ドリンクの瓶は何十と部屋隅の隅に転がっている。テーブルの上、散らばる雑誌は少しでもこの手掛かりになるだろうと魔理沙が置いていったものだ（どこから持ってきたかについては共犯者になるのも面倒なので聞いていない）。

本の山の上から科学雑誌を拾い上げ、眺めるともなしに眺めながら、ソファに身をもたせかける。持参したアルミのカップで濃く淹れた珈琲に口を湿らせると、こつんと小さく窓が音を立てた。ふと気配に顔を上げれば、窓外には馴染みの白狼天狗の顔。

「……柎？」

小さく頭を下げる彼女に、にとりは慌てて窓を開ける。ガラスの向こうから滑り込む冷気は、冷たく野を凍らせる冬山のもの。

「どうしたの？ こんな所まで」

「罫の方に行ったけど、誰も居ないようだったから」

「あー……、そっか。そうだね。……ごめん」

慌ててカレンダーを見れば、昨日がちょうど、対局の約束の日だった。いつもなら、鍋をつつきながら夜通し将棋を指しているはずだったのだ。もう十日も家に戻っていないことに思い

至ったにとりは、着たきり雀の服が急に気になりだし、脂と煤の染みついた袖口に鼻をつけて匂いを嗅ぐ。

「ごめんごめん、将棋の続きだよ。すっかりすっぱかしちゃって。なんか飲んでく？ ちよつとくらいなら時間取れるからさ」

「ううん。今日はちよつと寄っただけ。にとりも徹夜してるんだよね。私の方も任務がいくつか押してて……しばらく会えなそうだから」

「おりよ、そうなの？」

友人の意外な一言に、にとりは眉を跳ねさせる。椀はなおも抑揚のない声で、懐から白い封筒を差し出した。

「だから、先に封じ手と思って」

「え……ああ。うん」

にとりは押し付けられるようにして渡された封筒と、椀の顔と見比べる。

「……無理はしないでね」

そう付け加えると、白狼天狗はぺこりと一礼して飛び去ってしまう。親友の妙な態度に、にとりは後ろ頭を掻きながら首を捻る。

「ありや」

封筒の封が不十分だったか。寝不足で頭がぼんやりしていたか。傾けた拍子に、封筒の中身が地面に落ちてしまう。

床を跳ねるのは一枚の紙片と、将棋の駒。

「あ……しまった、見ちゃいけないのに」

ぼやきながら床のものを拾おうと屈んだにとりは、紙面に記された一手にはたと目を止める。

——31九、奔狼。

「……んん……？」

中断したままの盤面を記憶の中に手繰り、にとりは眉根を寄せて首を捻った。